

276

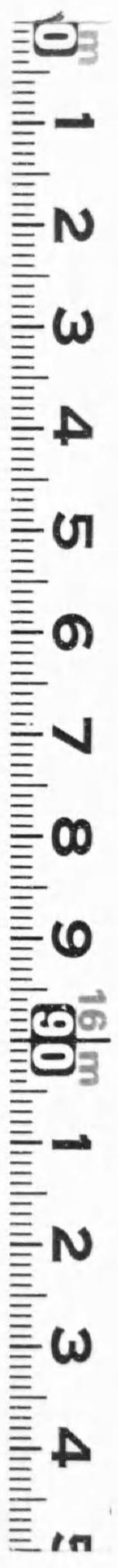
特 220

2

430

一如洞主武田豊四郎著

佛教女性觀



始

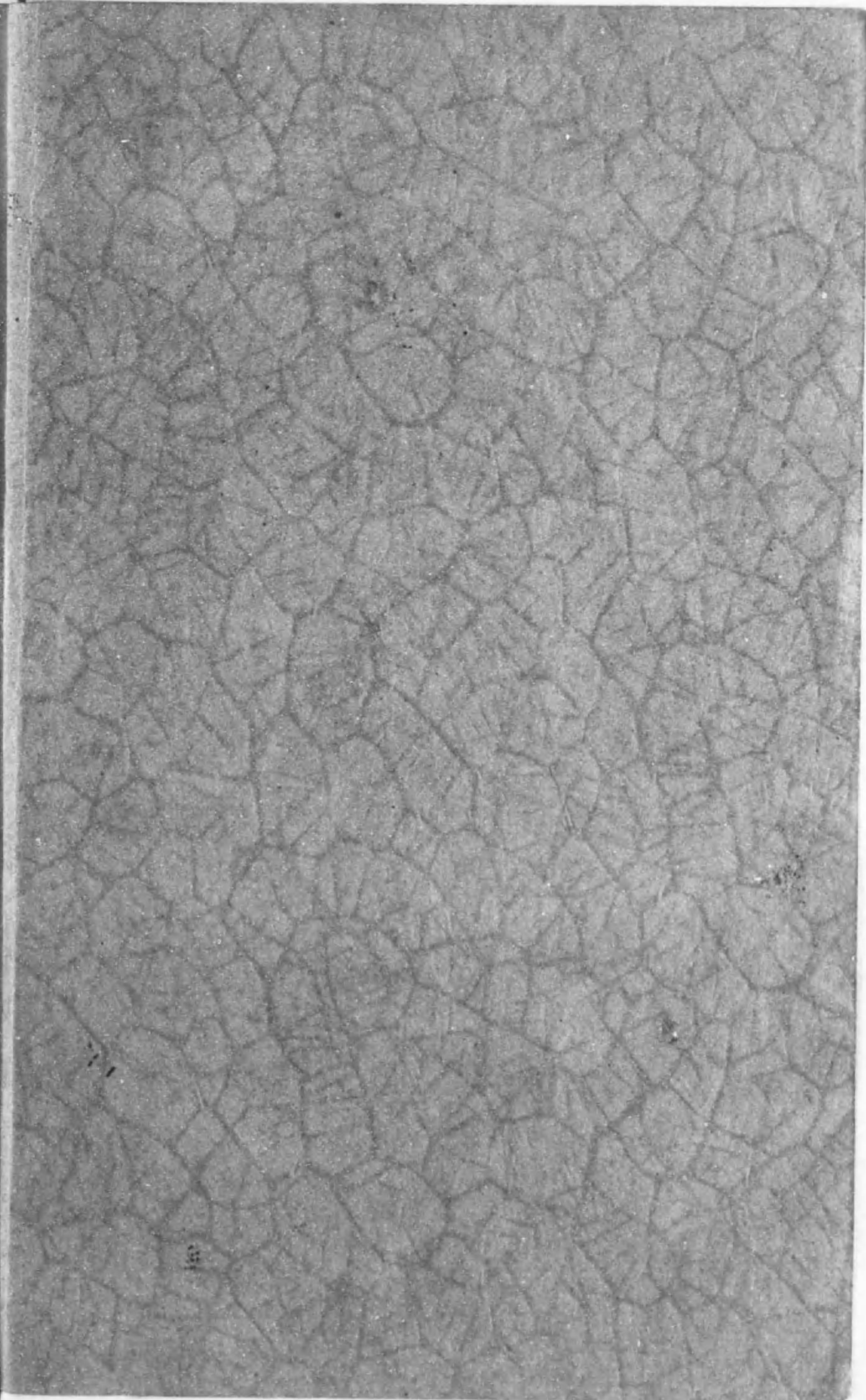


特 220  
430



佛教女性觀

一如洞主武田豊四郎著





祖國興隆日本佛教博覽會記念  
 刊行物の一として此書を上梓  
 し慈母の膝下に捧ぐ

著者



温良貞淑

頭山滿先生題字

頭山尚



法經師

道重信教大僧正現下題字

慈惠仁讓

志意和雅

大德正  
法經

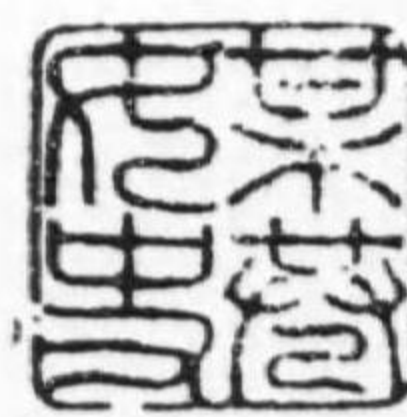


福 敬祥致



九十一歲

梅巷女史綯



字題自刀子綯橋棚

नमो बुद्धाय

बुद्ध  
धम्म  
संघ

उत्तमभिकु

字題丘比大マツオ僧高省旬緬度印



閑時の著者  
(一知洞舊館の庭に於て)

3

भद्रतुल्य



印度聖訓

大慈悲者は敵人乃放てり

箭射るは心憎む我殺さず

梅檀香樹は樵夫乃執せり

斧亦も芽葉を惜まらば

一如洞主

武田豊四郎



著者の親蹟





妹法二び及者著の装禮度印  
(眼開尊本盟聯教佛際國濱橫月七年四和昭)  
(影撮念記の際しめ勤を師祭用法大佛入)



佛靈古蒙び及鳥寶三禽聖  
(しせ察視を古蒙洲滿鮮朝が者著月八年昭和昭)  
(るらせ贈寄りよ氏生順里南弟法の住在連大際)

## 小序

婦人問題の喧しく論議せられつつある今日、釋尊其他の佛教諸聖の女性觀を探ることは、有意義な一研究であると確信する。

然し、佛教の教義及び實踐の核心となつてゐるのは、心靈の解脱といふ一大事であるから、佛教女性觀といふが如きは、佛教根本義から派生した、第二義的思想たるに過ぎない。

随つて、佛教聖典中から、組織的な女性觀を發見しようとするのは、誤つた期待であると謂はなければならぬ。

この「佛教女性觀」の一篇は、私が主要な佛教聖典中から蒐集した断片的資料を、出來得る限り、公平に且つ組織的に論述、解説したものに外ならぬ。

この一小著に依つても推知し得られる如く、現時東西の學者の論議しつつある婦人問題の多くが、既に往古の佛教諸聖の思索する所となつてゐたことは、確に吾人の驚異に價する。殊に、『一切の衆生に悉く佛性あり。』といふ靈的平等觀に立つて、女人の眞覺を促さうと努めた大乘佛教は、婦人解放運動に先鞭を著けたものと認めねばならぬ。

古代の印度人は、貴賤、男女を論ぜず、眞我の覺醒を至心に欣求してゐたのである。

二千六七百年前の婆羅門の一聖典中に、印度民族の最深祈願を表現してゐる左の聖句がある。

『願くは我を虚有より實有に到らしめよ、

願くは我を癡闇より慧光に到らしめよ、

願くは我を死滅より不死に到らしめよ。』

私等も、亦古代印度の求道者の如くに、眞我の覺醒に努めなければならぬ。

この貧しい一篇が、十方有縁の善女人に、眞實の覺醒と向上とを促す多少の機縁ともならば、私の満足は無上であらう。

昭和四年十二月三日夜

一如洞阿闍梨 武田豊四郎

梁塵秘抄より

女人に五つの障あり

無垢の浄土は遠けれど

蓮華の濁ひらくれば

龍女も佛になりにけり

龍女も佛になりにけり

などかわれらも成らざらん

五障の雲こそあつくとも

如來月輪かくされじ

目次

一 大日本の使命と女性	一
二 女性の文化的使命	四
三 女性向上の四位	六
四 佛教女性觀概論	一八
五 原始佛教の女人觀及び愛慾觀	二〇
六 性的缺陷に對する原始佛教の批判	三三
七 在家の女人に對する原始佛教の教化	四一
八 出家の比丘尼に對する原始佛教の教化	四九
九 原始佛教の理想とせる女人	六六
十 大乘佛教の女性觀及び愛慾觀	六五

十一 性的罪陥に對する大乘佛教の批判…………… 七〇

十二 在家の女菩薩に對する大乘佛教の教化…………… 七二

十三 出家の女菩薩の願行…………… 七三

十四 大乘佛教の女人成佛論…………… 七四

題字及口繪

- 頭山滿先生題字  
 道重信教大僧正現下題字  
 棚橋絢子刀自題字  
 印度緬甸省オツタマ比丘題字  
 閑時の著者  
 著者親蹟  
 印度禮裝の著者及び二法妹  
 聖禽三寶鳥及び蒙古靈佛

佛教女性觀

早稻田大學 教授 武田豊四郎著

一 大日本の使命と女性

古語にも、「光は東方より、法は西方より。」とある如く、精神的文化の曙光は先づ亞細亞の空に現れたのである。歐洲文化が、多くの善美な特長を有してゐることを認めねばならぬと共に、亞細亞文化の優秀な價値を忘れてはならない。歐洲文化が、政治經濟的、唯物的、機械的に傾き、權力の獲得を目標と爲してゐるのに反し、亞細亞文化は、哲學宗教的、唯心的、靈智的に向ひ、平和を實現することを理想と爲してゐる。過去の亞細亞は、哲學、宗教の搖籃地であり、精神的文化の郷土であつた。斯く、全亞細亞の文化が、精神的傾向

を有するのは、畢竟印度文化の影響の致す所である。印度は、實に全亞細亞の心臓とも稱す可き國であつて、西曆紀元前第四世紀末から一千五百年の間、文化上、通商上に於て優越な國際的地位を占め、その文化を全亞細亞に流布したのである。印度の古聖は、哲學を基礎として宗教を組織し、宗教を根柢として道徳を確立し、更に哲學、宗教、道徳の調和の上に、眞實の文化的社會を實現せねばならぬと信じてゐたのである。随つて、此等の古聖によつて開拓せられた印度文化は、著しく哲學的、宗教的、道徳的に傾いてゐた。斯かる高級の精神的文化が、全亞細亞に普及することを得たのは、主として佛教の力に因るのである。佛教は印度文化の一表現であるから、佛教の流傳は、やがて印度文化の流傳を意味する。其上佛教は、印度の種々なる文物を全亞細亞に普及する任にも當つたのである。

物質的、理智的の進歩を目標として、個人主義、利己主義、唯物主義の邪道に馳せた舊歐洲文化は、今や崩壞の悲運に臨んでゐる。又精神的文化の郷土であつた亞細亞は、眞理、信仰、道義の三者を把持する力が弱くなつた結果、文化上の獨立を失うて、歐洲文化の前に跪

き、且つ政治上、産業上に於ても、歐米諸國の掣肘を受けてゐる。今は正に世界苦の時代である。人類が此窮境を脱して、眞實の文化を建設しようとするには、亞細亞の古代理想を復活するの外に途が無いと思ふ。唯物的な歐洲文化は、到底現時の社會を救ふ可き實力を有さない。吾々は、先づ眞理、信仰、道義を基調とする新亞細亞文化を建設し、進んで世界を平和の淨土に化せなければならぬ。斯かる神聖な運動の導師たる可き日本民族は、男女を論ぜず重大な責務を擔ふてゐるのである。殊に或民族が覺醒の新紀元に入らうとする際には、女人の活動に待つ所が甚だ多いのであるから、我國の女性たる者は、今正に覺醒せなければならぬ。近時、女子の心理、體質、地位、教育、任務、職業等が、我識者間に論議せられて來たのは、女性の自覺、向上を促す機縁として賀す可きことである。東洋諸國が覺醒に向ひつつある今日、其先進國たる大日本に、優秀、堅實な女性文化の出現することは、吾々の衷心より切望する所である。

## 二 女性の文化的使命

男女兩性の間には、本質的の差異が存し、各獨特の文化的使命を帯びてゐるのであるから、之に尊卑、優劣を分つのは不當である。又男女が相合して一個の完全體を造るものである以上は、人類の文化的生活も、亦兩性の同心、協力によつて營まれる可き筈である。「男女相合して全一をなすが故に、妻は夫のアルドハーンガ(半身)なり。」といふ印度民族の夫婦觀、乃至「然れど開闢の初より人を男と女とに造り給へり、斯る故に人はその父母を離れて二人のもの一體となるべし、然ればはや二人にはあらず一體なり。」(改譯新約聖書マルコ傳福音書第十章)とある基督教の男女觀は、亦以て全人類の生活にも適用が出来るのである。英國の詩人テニスン卿も、「男女を分離して觀察するに、何れも全一なるもの一半を占有す。」と言ふてゐる。

歴史哲學の泰斗リツケルト氏が、「男子の性質は將來の事業に適し、女子の性質は現在の

生活に適す。」と道破してゐる如く、男女は各自異つた天職を有する。妊娠、出産、育児を天職としてゐる婦人は、自然が人類に命じた生殖の大事業に就いて、男子よりも多く關與してゐる譯である。此一例の示す如く、兩性は孰れも他の追従し能はぬ獨特な文化的使命を帯びてゐるのであるから、互に異性の任務を理解、尊重し、共に手を携へて人類生活の向上、發展を圖らねばならぬ。女性を劣悪なものとして除外した男性中心の舊文化は、確に畸形的な文化である。將來實現せられるべき新文化は、必ずや男女兩性の共同的所産でなければならぬ。然れば、今後に於ける女性は、如實に其天職を自覺して、男性と共に新文化の建設に參與すべきである。左に掲げる古代印度の聖詩は、協和の威力に就いて吾々に教へてゐる。

「若し吾等協和して進まば、

若し吾等協和して語らば、

若し吾等協和して働かば、



吾等の心と舌とは更に威力を得む。」

世界人口の約半數を占めてゐる女性が、若し一様に覺醒、努力したならば、人類の文化も著しき發達を見るに相違ない。近時、男性が次第に女性の尊嚴を認め、之を從來の奴隸的狀態より解放しようと努めるやうになつたことは、人文の發達上、慶賀すべき現象である。然し、放縱な生活を許すことが、婦人に對する眞實の解放ではない。又理智を武器として男性に對抗するのが、婦人たる者の眞實の自覺ではない。

私の今筆を染めつつある此貧しい論説が、眞實の覺醒を望むでゐられる淑女各位に、臚氣な光明でも捧げ得れば幸甚である。

### 三 女性向上の四位

一切の女性が、如何なる理想に向つて進まねばならぬかといふことは、極めて重大な問題である。私は今不完全より完全に至るまでの女性進化の道程を、次の四位に分つて考察

したいと思ふ。

(一)性的缺陷を有する非女性的婦人

(二)正しい愛慾生活を營む純女性的婦人

(三)愛慾を超越し得た無我的婦人

(四)靈肉一如の生活に入つた大我的婦人

生物進化論の始祖ダーキン氏の唱へてゐる如く、女性は間斷なしに性慾的であり、男性は中絶して性慾的である。されば一般婦人の生活は、性慾、戀愛を基調となしてゐると認めねばならぬ。然し、婦人の性慾生活にも、道徳、法律によつて規定せられた範圍がある。眞實の戀愛を基礎とし、正當な形式と規約との下に男子と結婚するのが、女子たる者の履むべき常道である。斯かる正しい愛慾生活を營み得ない婦人は、廣い意味に於ける性的不具者である。婦人中にて、性慾の病的に減退若しくは缺乏せる者、同性愛、色情狂の如き變態性慾に陥れる者、一夫多妻、一妻多夫、荒淫、賣春等の如き背理的な邪淫生活に墮落

せる者、女性の美點を失うて男性化した者等は、何れも前に掲げた第一位の性的缺陷を有する非女性的の婦人である。

第二位の正しい愛慾生活を營む純女性的婦人とは、戀愛を基礎として正式に結婚し、婦徳を嚴守する者を意味する。第三位の愛慾を脱離した無我的婦人とは、宗教的鍛鍊を経た結果、女子の生命たる愛慾を超越して、無我、無性の境地に進んだ者を謂ふのである。原始的佛教たる小乗教は、斯かる脱俗的、獨善的、非活動的の靈格を得た者を以て、理想的婦人と認めてゐる。第四位の靈肉一如の大我的婦人とは、宗教的體驗によつて愛慾を清淨化し、肉を靈化し、煩惱即菩提、生死即涅槃の宗教生活に入り、進むでは現實界を聖化しようとする偉大な女性を謂ふのである。革新的佛教たる大乘教は、斯かる靈肉一如的、利他的、活動的の靈格を得た者を、理想的婦人と爲してゐる。上記の四類の女人中、第一位は不具種性、第二位は凡俗種性、第三位は小乗種性、第四位は大乘種性である。此中に於て、將來一切の婦人が、その修養、進化の理想となすべきものは、第四位の大乗的女性

である。大乘佛教の聖典には、斯かる理想的婦人の典型を諸處に説き示してある。

右に述べた女性向上の四位を具體的に説明するため、印度の文豪ターゴル翁の短篇戯曲「チトラ姫」を例に引かう。此戯曲は、翁が情熱に燃えてゐた二十八九歳前後の作品であつて、男女の關係、婦人の社會的地位、女性自覺の道程等に關する翁の思想を最もよく表現してゐる。此戯曲の題材となつたのは、大敘事詩「大婆羅多族」に出づる左の一挿話である。

般頭王の第三子にして文武兩道に秀でた阿順は、十二年間靈地巡拜の旅を續けてゐた際に、摩尼城と呼ぶ都に來たことがある。其城主チュリトラブーハナ王の祖先の一人は、老年に及ぶまで子を設けないのを憂ひ、シブ神に立願して烈しい苦行を積むだ。その至誠に感應したシブ神は、老王及び其子孫に男子を一人宛授けることを約した。然るに、當王チュリトラブーハナ王の代に及んで、何故かチトラ姫と呼ぶ美しい女子が生れた。父王は姫を男子と同様に育て上げ、之に弓馬、刀槍の武藝を學ばしめた。此地へ放浪して來た阿順王

子は、チトラー姫の美貌に戀著し、妻に迎へたいと城主に請うた。其時城主は、「私には外に子が無い、若し姫を御身に差し上げるとすれば、其間に生れた男の子は城に留つて王位を繼がねばならない、私の子孫は唯一人の子しか得られないといふ神勅であるから……」と阿順に提議した。阿順は城主の要求を納れて、三年の間姫と此地に同棲した。聽て二人の間に男子が生れた時、阿順は再び放浪の旅に上つたと談られてある。以上が大叙事詩に出づる挿話の概要である。ターゴル翁は、右の古譚に新しい生命を吹き込むで、一幕九場から成る絢爛な戯曲「チトラー姫」を創作したのである。左に此戯曲の梗概を談らう。

第一場に於ては、男子の服飾を着けたチトラー姫が、春の神ヴサンタ及び戀の神マダナの前で、次の如き事件を物語つてゐる。或日姫はプルナ河のほとりに狩し、駒から下りて叢林の中へ鹿を追うて行つた。其時姫は枯葉を床にして睡つてゐる一人の偉丈夫を見た。此偉丈夫は、當時武士の鑑として知られた阿順王子であつた。幼時から變則な男子の教育を受けた姫の心には、我執、憍慢の情が充ちてゐた。姫は携へた弓の端を以て、阿順の眠を覺

ました。驚いて跳び起きた阿順は、微笑を漂はして姫を眺めた後、叢林の奥へ姿を隠した。姫は自分が異性の前に立つてゐる一個の女性であるといふことを、此時初めて感じたのである。男性的であつた姫の心にも、斯くして性の目覺めが起つたのである。其翌日、姫は着馴れた男裝を棄て、紫紺色の絹衣を身に纏ひ、瓔珞、環釧、玉帶等を美々しく飾り、阿順を林中の神廟に訪うて愛を求めた。然し、阿順は姫の熱烈な愛を斥けて、「私は女身を犯すまいと誓うた苦行者であるから、おん身の愛を受け入れる譯に行かぬ。」と諭すのであつた。——姫は右の事實を告白した後、此戀を成就せしめ給へと更めて二神に訴へた。二神は姫の胸中を憐れむでその願を容れた。愛の神マダナは阿順を戀の俘として姫の前に跪かさうと約し、春の神ヴサンタは一年を期限として姫に無上の美容を授けようとして誓うた。

第二場では、阿順が美女の幻影に惱まされつつ神廟に黙坐してゐる所へ、春の神から無上の美貌を授けられた姫が、阿順を歡樂の世界に誘はうとして現れる。道念の堅い阿順も忽ち姫の美貌に魅惑せられて了つた。斯くして戀の勝利者となつた姫の心に、新しい一抹

の黒雲が現れた。それは阿順が單に姫の假裝の美に憧れてゐるのに過ぎないといふ不満である。

第三場では、姫が戀の成就を二神に報告し、阿順は假裝の美貌だけを愛してゐるのであるから、何卒元の姿に歸らしめ給へと歎いてゐる。二神は、「花咲く春が去つて、實の生る秋が来るやうに、阿順もおん身の假裝の美に厭いて、眞實の姿を求める時が来る。」と慰めて、姫を阿順の許に歸らしめる。

第四場に至れば、チトラーとの對話によつて、阿順の胸に青春の歡樂から覺めようと望む念が萌して来る。

第五場に於ては、愛と春との二神が、姫の運命に就いて物語つてゐる。

第六場に於ては、果敢ない歡樂の夢から覺めかけた阿順が、「私の生活は充實せられてゐない、私は眞實のおん身に觸れたい。」と姫に訴へる。姫は、「やがて一歳が満ちて、此美貌を失はねばならぬのであるから、それまでは青春の歡樂に酔ひませう。」と阿順を慰める。

第七場に於ては、第一場と同じく二神が姫と對話してゐる。春の神は、「最早今宵で一歳の期限が満ちるから、おん身の美貌も刹那に凋むであらう。然し、おん身と阿順との間には、尊い新生活が生れる。」と姫に談つてゐる。

第八場に於ては、眞實の姫に觸れようとする阿順の痛切な欲求と、假裝の美貌を脱いで本然の自我に復らうとするチトラーの強烈な願望とが、翁の靈筆によつて鮮かに描かれてある。

最後の第九場に於ては、美貌や歡樂を以て阿順に奉仕する姫の花供養が、既に一場の春の夢となつてゐる。姫は今や美貌、我執、懦弱等の有らゆる假裝を脱ぎ、其胎内に第二の阿順を懐きつつ、眞我を體驗した忠順な友として阿順の前に現れてゐる。初めて姫の魂に觸れた時、歡喜に打たれた阿順は、「愛する者よ、私の生活は満たされた。』(Beloved, my life is full)と叫ぶ。又本來の姿に復ることの出來た姫は、靈肉一如の尊い生活が創造せられたことを喜むた。

以上は、戯曲「チトラー姫」の要旨である。私の見る所では、女性向上の眞道を示すのが、此戯曲の眼目であると思ふ。此戯曲を熟讀、玩味する時には、チトラーと呼ぶ一女性が、妄我の生活を脱して眞我の生活に向上する道程を、明に理解し得るのである。孫悟空と呼ばれた傲慢な猿が、獸性を脱して佛果に到る迄の靈的進化を描いた支那の奇書「西遊記」は戯曲「チトラー姫」と似通ふた點がある。「大般涅槃經」第二十七卷に、「一切の衆生に悉く佛性有り。」と説いてある如く、大乘佛敎に於ては、吾人の心源に佛性と呼ぶ所の眞我が潜在することを認めてゐる。大乘佛敎、梵敎等の如き印度の唯心敎は、この眞我を實現し得た活動的、積極的の涅槃を理想としてゐる。然るに、原始的小乘佛敎に於ては、小我の迷執を斷除し得た無我的、消極的の涅槃を理想としてゐる。涅槃とは、一切の不完全を脱却し得た完全状態たる解脱境に外ならぬ。戯曲「チトラー姫」は、一女性が妄我の生活より大乘的涅槃に進むまでの、女性向上の四位を示したものであると解釋し得る。

此戯曲の第一場に於ては、男子として育て上げられた畸形的女性たるチトラー姫が、先

づ舞臺に現れる。此時の姫は、前記の性的缺陷を有する非女性的婦人の類型を示したものである。女身にして男子と同一の教養を受けたといふことは、甚しい虚偽、不自然である。男装して己が武力を誇つてゐる姫の如きは、普通の女性にすら成り得ない人生の落伍者であつて、最も低劣な女人生活に墮落した者である。西洋思想を鵜呑にした我國の女性中に、往々此種の畸型が存するのは甚だ嘆かましい次第である。

叢林に於いて阿順と會見した刹那、チトラーの心に大革命が起つた。姫は此時から最早傲慢な男性的態度を執ることが出来なくなり、愛慾を生命とする凡庸な婦人に變じて了つた。これが即ち姫の經驗した第一の更生である。更生した第二の姫は、前記の正しい愛慾生活を營む純女性的婦人の典型である。愛慾に熱狂した姫は、阿順を魅惑する武器として春の神から絶倫の美貌を請ひ受けた。阿順は果して姫に征服せられた。然し、青春の男女の間に生れた愛は、如何に深く且つ美しくとも、一時的、盲目的の狂愛に過ぎないから、戀では春の花のやうに散らなければならぬ。又如何に正しい愛慾生活でも、靈的要素によつて

淨化せられざる限りは、畢竟妄我生活の範圍を脱し得ないものであるから、魂の目覺めた人を満足せしめることは出来ない。果せるかな、阿順の胸に虚妄の歡樂から覺めようとする一念が萌した。阿順は、「私の胸は不満だ、私の心は安靜を覺えない。」と懊惱し、如何なる困苦に遭うても弛まない永久不變の結合を姫に求めるやうになつた。同時に、姫も亦阿順が假裝の美貌のみを愛してゐることに不満を抱くやうになつた。生物學的妄我の結合に基く單なる愛慾生活は、何時か破綻の悲運に遭遇しなければならぬ。靈に目覺めたチトラは、終に肉の美を脱落して、無我的、超女性的の境地に飛躍した。これが彼女の經驗した第二の更生である。小乗佛教に於ては、生物學的妄我を脱却した聖者を、阿羅漢と呼むのである。無我の境地は、男女兩性の對立を絶した平等一相の状態であるから、這裡に於ては、男子も最早男性でなく、女子も亦女性でない。然し、小乗佛教の提唱してゐる無我の生活は、餘りに脫俗的、消極的、非活動的である。吾人は、更に此境地に一步を進めて、俗諦と眞諦、煩惱と菩提、現實と理想、肉と靈との矛盾が、圓融、調和せられた人間的、積極的、活動的な大我生活

に向上しなければならぬ。斯かる靈肉一如の生活が、大乘佛教の理想とする所である。無我生活は、大我生活の第一歩ではあるが、其處に停滯してはならない。春の花が散つて、秋の實が生るやうに、大否定は大肯定の準備に外ならぬ。チトラは、美貌と俗愛とを棄てたけれども、聖愛を抱いて復活した。然し、この聖愛は、俗愛の淨化せられたものに過ぎないのである。第二の阿順を胎裡に養ひつつ、聖愛に生きる純化せられた女性として阿順の前に立つたチトラは、第三の更生を受けた大我的婦人の典型である。氷が溶けて水となるやうに、愛慾が淨化せられて聖愛に變じたのが、靈肉一如の大我生活である。シュライネル氏の如きも、其著「夢」の中の『歡樂童子の出家』と題する一篇に於て、青春時代の戀から生れた歡樂童子は、眞摯な情人の間に於ては、同情青年と呼ぶ完全な愛に變形せねばならぬことを示してゐる。小乗佛教は、枯木、死灰の如くになれと男女兩性に要求してゐる。然し、大乘佛教は、宗教的信念によつて淨化せられた愛慾生活を、必ずしも拒否しない。

大乘佛教に於ては、眞我を完全に實現した者を佛陀と名け、此理想的境地に向上しつつ

ある者を、菩提薩埵略して菩薩と呼むのである。一切の人類は、當に菩薩行を修めて佛果に到達しなければならぬ。戯曲「チトラ姫」は、チトラと呼ぶ一女人が、妄我の生活を脱して眞我に目覺めた所謂菩薩位に入るまでの心的過程を、象徴的に描いたものであつて、佛教女性觀を系統的に縮寫したものと認め得る。

#### 四 佛教女性觀概論

佛教は二千五百年に垂んとする長い歴史と、亞細亞洲の大部分に跨る廣い教區とを有する大宗教であるから、其教理及び教團の歴史が甚だ複雑である。佛教は教理上の差違から大乘と小乗との二大系統に分たれる。又大乗、小乗には、更に幾多の分派が存在する。印度に於ける小乗佛教は、二十部に分裂したと傳へられる。我國に現存する大乘佛教は、自力聖道門と他力淨土門とに分たれるのが普通であるが、他の標準から、顯教と密教とに大別せられることもある。同じ佛教中にも、立脚地を異にした數多の教系が對立してゐる

こと故、佛教の女性觀なるものも實に複雑を極めてゐる。一方には女人排斥の宗派があり、他方には女人崇拜の宗派があるといふ風に、全く相反した女性觀を、同じ佛教の内に發見し得るのである。

佛教女性觀は、佛教々理の副産物であるから、常に教理の發達に伴うて變遷してゐる。佛教中の舊教と目すべき小乗佛教に於ては、極端に女性及び愛慾を呪詛し、煩惱を斷滅して無性、無我の阿羅漢位に到るのを出家生活の理想となしてゐる。然るに、新教たる大乘佛教にありては、必ずしも女人及び愛慾を無視せず、煩惱を淨化して佛果に到ることを、一切の男女の理想となしてゐる。是の如く、教理の發展に伴うて、女性觀も亦進歩を來してゐるのである。これを概括して云へば、大乘佛教の女性觀が、佛教女性觀の極致である。然し、同じ大乘佛教の女性觀中にも、種々なる異解が存することは勿論である。複雑な佛教女性觀を、悉く網羅し且つ批判することの煩を避けるため、以下には、その最も重要な題目のみに就いて考察を試みよう。

## 五 原始佛教の女人觀及び愛慾觀

今愛慾及び女人に對する原始佛教即ち小乘佛教の見解を述べるに先ち、其教祖たる大聖釋迦牟尼佛の略傳を談らねばならぬ。釋尊出現の年時に就いては、數十の異説が存してゐる。其中で、西曆紀元前五百六十三年を佛生とし、同四百八十三年を佛滅となす説が、確實に近い。釋尊の屬する釋迦族は、中印度に數千方哩の領土を有してゐた豪族である。釋尊は、父淨飯王が五十餘歳、母摩耶夫人が四十五歳の頃に生れたのである。釋迦牟尼即ち釋迦族の聖者といふ名は、正覺を得た後の尊號であつて、それまでは悉達多と呼ばれてゐたのである。母の摩耶夫人は、産後七日を経て逝去したから、淨飯王の第二妃であり、摩耶夫人の實妹である波闍波提即ち生主夫人が悉達多を愛育した。悉達多は幼時より文武の道を學び十五歳の時に太子に立ち、翌年同族の淑女耶輸陀羅姫を正妃に迎へた。太子が姫を獲るために、貴族の子弟と爭婚競技を演じたといふことが傳へられてゐる。一種の釋尊傳たる「佛

本行集經」には、其時の競技の顛末を敘べた捨衛爭婚品第十三と題する一章がある。後に佛弟子となつた阿難陀尊者や、佛敵として名を留めた提婆達多等も、爭婚競技に於て悉達多に敗られた人々である。太子と耶輸陀羅夫人との間には、羅睺羅と呼ぶ一男子が生れた。地上に天國を移したやうな王者の生活も、聰明にして内觀に沈み勝な悉達多太子を、永く満足せしめることが出来なかつた。無常、虛妄、苦惱に充ちた悲痛な世相を觀じた時、若い太子の胸に不安が涌いて來た。然し、宮裡には恩愛の情斷ち難き老王、寵妃、愛子が居り、又無盡の財寶と無數の姪女とが、絶えず太子を享樂に誘うてゐる。佛陀も本來は凡夫である。一個の凡人として生れた太子が、「宮裡に在つて愛慾に耽るべきか、出家して眞理を求むべきか。」と、長い間苦悶したのも當然である。太子が斷乎たる決心を以て王城を脱出したのは二十九歳の時である。それより六年間、絶えず靈肉の苦闘を續けた末に、三十五歳の時惡魔を降伏して正覺の佛陀となつた。太子の降魔成道とは、畢竟肉に對する靈の勝利に外ならぬ。諸の佛傳は、大魔王及び其眷屬が、太子の成道を妨けた光景を、莊重・艶麗に描い



てゐる。太子を迫害した悪魔といふのは、太子の心裡に残つてゐた煩惱、妄想、邪念を擬人したものである。佛傳に従へば、魔王は最初數多の鬼軍を率ゐて太子に肉薄したけれども、その威嚇が無効であつた。その次に、魔王は太子の本國から來た使者に變じ、「本國に一大事が起りました。惡逆無道の提婆達多が國を奪うて太子殿下の宮室に亂入し、財寶、王妃をわが物となし、御父を押し込めましたから、一刻も早く御歸城下さい。」と太子を欺いたとある。之によつても、父王、妻子、財寶等に對する執着が、此時まで太子を苦めたことを知り得る。魔王が最後に試みた一策は、美しい三魔女をして太子を誘惑せしめることであつた。然し太子は此誘惑にも打ち勝つことが出來た。馬鳴菩薩の「佛所行讚」第三卷破魔品の文は、魔王が印度の戀の神愛欲天であることを暗示してゐる。太子が魔女の誘惑に打ち勝つたといふのは、性欲を斷滅し得たことに外ならぬ。「我が骨肉は盡きるとも、我が血肉は涸れるとも、正覺を得なければ此座を起たぬ。」と誓つて、菩提樹下に心を凝らした釋尊は最後の際まで悩ましたのも愛慾であつた。斯くして悪魔を降伏し、正覺を成就した釋尊は

四十五年の間眞理を宣傳した後、八十歳を以て靜に娑羅林中に入滅したのである。

多年愛慾と戦つて來た釋尊が、女人や性欲を如何に觀たかといふことは、特に興味の深い問題である。

今先づ釋尊の女人觀から説かう。大乘佛教の聖典は、何れも後世の佛教聖賢が作つたものであるから、佛説とは認め得られない。それ故、小乗教の四阿含經等に據るの外、佛陀の眞意を探る方法がない。茲には、最も原始的な佛典から、釋尊の女人觀を探らう。摩醯提利と呼ぶ一婆羅門が、美しい娘を伴ふて竹林精舎に釋尊を訪うたことがある。此娘は世に變なき美人であつたから、國王、貴族、富豪から頻に結婚を申し込まれてゐた。然し、其父は總ての求婚を謝絶し、娘を釋尊に獻上するため、竹林精舎へ來たのであつた。妻子、珍寶、王位を芥の如くに棄てて出家した釋尊が、今更美人を要する譯はない。釋尊は、一言の下に婆羅門の提言を斥けた。然るに一人の好色の長老比丘が、釋尊に代つて此美人を賞ひたいと申し出でた。茲に於てか釋尊は、女人に九法の弊惡あることを説いて、比丘を叱責したと

いふ。その九惡といふのは、次の如くである。

- (一) 女人は臭穢、不淨なり。
- (二) 女人は悪口す。
- (三) 女人は反覆常なし。
- (四) 女人は嫉妬す。
- (五) 女人は慳嫉す。
- (六) 女人は多く遊行を喜ぶ。
- (七) 女人は瞋恚多し。
- (八) 女人は妄語多し。
- (九) 女人は言ふ所輕舉なり。

右の物語は、「出曜經」にも記せられてあるから、恐らく事實であつたらう。「出曜經」では、摩醯提利を摩因提と呼びてゐる。

又小乘佛教に屬する「增一阿含經」には、女人が次の五慾想を有することを説いてある。

- (一) 富貴の家に生れむことを欲す。
- (二) 富貴の家に嫁せむことを欲す。
- (三) 夫主に其言を用ひられむことを欲す。
- (四) 多く兒を生まむことを欲す。
- (五) 家に在りて獨り權威を恣にせむことを欲す。

右は釋尊の女人觀の一例である。次には佛陀の直説か否かは不明であるが、確に佛陀の女人觀を承け繼いだと認むべき經説を擧げよう。「出曜經」には、妄瞋、罵詈、呪詛、鎮壓、慳貪、好飾、含毒、嫉妬を、女人に特有な八態と認めてある。又或經典には、女人が次の如き特徴をもつと説いてある。

- (一) 自ら莊嚴すること。
- (二) 異性と欲樂を恣にすること。

(三) 哀美の言辭を弄すること。

又或經典には、女人が地獄に陥る原因を左の如く數へてある。

(一) 女人は珍寶、衣被を貪り、欲心多きが故に。

(二) 女人は相嫉妬するに由るが故に。

(三) 多口舌に由るが故に。

(四) 姿態に淫意多きが故に。

又女人に邪僞、諂曲の多いことを説いた次の偈、即ち聖詩は、大乘及び小乗の種々なる經典に出てる。

『一切の江河に必ず廻曲あり、

一切の叢林に必ず樹木あり、

一切の女心に必ず諂僞あり、

一切の大力に必ず安樂あり。』

嫉妬心の強いことも、女子の特性として佛典に數へてある。「正法念經」第十六卷に「女人の性嫉妬多し、丈夫未だ隨はざれば便ち妬意を起す。」とある。又女人の心身が、臭穢、不淨に充たされてゐることが、「優填王經」等に細説せられてある。或經典には、女人の八十四邪態が列擧してある。錫蘭嶋に存する巴利語の原始佛教聖典にも、以上に述べた所と一致する釋尊の女人觀が諸處に發見せられる。諸の原始佛教聖典に據つて判斷するに、釋尊は女人を以て罪垢の充ちてゐる惡魔であると認め、女人は邪僞、諂曲、嫉妬、猜忌、瞋怒、怨憎、害意、好淫、闇愚、慳貪、憍慢、怖畏、偏執等の諸の邪念を心に懷き、妄語、兩舌、綺語、嘲罵、拚粧、遊樂、妖媚、妄動等の諸の過失を、身口に於て犯すものと斷定してゐる。三界の衆生を吾子の如く慈愍する大聖釋尊が、何故に女人を罪障の深い惡魔と觀たのであらうか。此疑惑を釋くためには、釋尊の悟つた所の眞理を探らねばならぬ。

釋尊の説く所に從へば、心身、外界等の諸現象は、皆因縁が和合して生じたもので、『我』即ち個性と呼ぶべきものは本來實在せぬ。然るに、『無明』に迷はされて『我想』即ち小我の

迷執を起し、『我想』は更に諸の『惑』即ち煩惱を生じ、『煩惱』は善惡の『業』を造り、『業』は苦樂の果報を招き、斯くして生死、苦惱の大海たる相對界、現實界が現れたのである。若し『我想』を除き、『無明』を拂ひ、『煩惱』を斷つたならば、生死の大海を解脱して、涅槃の理想界に到ることが出来るのである。無我の眞理を體驗して涅槃を得た者を、阿羅漢即ち應供と名ける。應供とは一切の衆生の供養、尊重すべき聖者といふ意味である。釋尊及びその弟子中の諸大弟子は、現世に於て既に阿羅漢位に到達してゐる。

小乗佛教の説く所に従へば、阿羅漢となるのが、全人類の最高理想である。

涅槃に到るため、必ず斷滅せねばならぬ惑即ち煩惱に、根本惑、枝末惑の二種がある。根本惑は更に十種の見惑と九種の思惑とに分たれる。身見、邊見、邪見、見取見、戒禁取見、貪欲、瞋恚、愚癡、慢、疑が、所謂十種の見惑である。見惑とは、智力上の迷見を意味する。次に九種の思惑は、見惑中の貪欲、瞋恚、愚癡、慢の四惑を本體として起す情意の上の惑想である。此等の根本惑中でも、貪欲、瞋恚、愚癡の三毒は、諸の惡業を産む動力であるから

之を三毒、又は三根、三垢、三穢等と名ける。男子に比して理智の發達が鈍く、又愛慾煩惱を生命としてゐる女人在、見惑、思惑を最も多く具有してゐることは疑はれぬ。釋尊の慧眼より觀れば、凡夫中の凡夫たる女人は、罪垢の結塊であつたに相違ない。釋尊の女性觀は、主としてその宗教的眞理から演繹せられたものであるが、此外に、尙斯かる女性觀を主張せしめた幾多の原因が存する。今釋尊の女人觀を構成してゐると考へられる主要な材料を、左に列擧しよう。

(一) 釋尊の體驗した無我の眞理から批判すれば、一切の女人は、我見、我執、我慢、我欲、我癡、我愛等の諸煩惱の結塊である。釋尊は、時に斯かる哲學的、宗教的見地に立つて、女人の缺陷を指摘したことを思はれる。

(二) 釋尊當時に於ける印度の女人が、放縱な肉慾生活に陥つてゐたことは、印度の文獻によつて十分に察知し得る。釋尊は、その直接に見聞、觀察した所を説法中に活用して、女人の醜態を指摘した場合もあつたに違ひない。

(三)一切の魅惑中、最も危険にして且つ引力の強いのは女人である。古來、數知れぬ在家の男子が、女人に迷ふて一身一家の滅亡を招いた。又聖道に入つた出家の男子にして、婦人のために墮落、浪轉した實例も多々存する。三十五歳正覺成道の曉まで、愛慾と戦つて來た釋尊は、シヨーベンハウエルやトルストイなどと同じく、女性の魔力を十分に實感してゐたのである。靈界の大導師たる釋尊が、女人及び愛慾の恐るべきことを説いて、在家、出家の男子に警告を與へたのは當然である。

(四)古歌に、『慈悲の眼に憎しと思ふものは無し、科ある身こそなほ哀れなれ。』とある如く、罪障の深い女人の姿は、釋尊の慈眼に最も痛ましく映じたのである。在家の婦女を邪淫の淵から救ひ上げ、出家の比丘尼を愛慾の糺から釋き放たねばならぬといふのが、釋尊の大本願であつた。そのためには、女人及び愛慾の不淨を力説して、女人を反省せしめる必要が存したのである。

(五)女人を罪惡、不淨の權化と見るのが、釋尊時代の印度思想界の一般的傾向であつた。

釋尊の女人觀が、或程度まで時代と環境との影響を受けてゐることも、拒まれない事實である。

以上の記述が示す如く、釋尊は在家、出家の男女を、人生最高の理想に導くために、女人の罪惡、短處を力説したのである。釋尊を目して、男尊女卑の首唱者となし、或は女人を虐待、束縛した者となすが如きは、最も甚しい謬見である。

次には釋尊の愛慾觀を考察しよう。

印度の聖哲は、靈的願望と肉的欲求との間に、根本的矛盾の伏在してゐることを洞察し肉を捨てて靈に走るか、若くは肉と靈とを調和するかの外、此大矛盾を除く方法が無いと考へたのである。同じ佛教の中でも、小乗佛教は肉を捨てて靈に走り、大乘佛教は靈によつて肉を淨化しようとしてゐる。然し、靈的生活を第一義となせる點に於ては、大乘も小乗も差異が無い。吾々凡夫の營むでゐる無自覺な愛慾生活は、煩惱を斷じて無我を悟らうとする小乗教から觀ても、煩惱を淨化して大我に到らうとする大乘教から觀ても、決して理想

的生活ではない。是の故に、大乘、小乗の聖典には、愛慾、煩惱に對する呪詛が隨處に存する。殊に釋尊時代の原始佛教は、愛慾を以て極重の煩惱となし、教理上並に實踐上に於て、極力之を排斥してゐる。煩惱の特に強い印度人を教化するには、釋尊も多大の苦心を費したものである。印度の如き愛慾の穢土に聖哲が輩出したのは、恰も淤泥に白蓮を生じたやうなものであらう。釋尊は口を極めて愛慾の過害を説き、在家の男女には不邪淫戒を嚴守せしめ、出家の男女には性交禁斷を強制してゐる。阿含部の「訶欲經」に出づる左の文は、釋尊の愛慾觀を明瞭に示してゐる。

『女色は世間の枷鎖なり、凡夫戀著して自ら抜くこと能はず。女色は世間の重患なり、凡夫之に苦みて死に至るまで免れず。女色は世間の衰禍なり。凡夫之に遭へば厄として至らざるなし。』

日々社會に發生する罪惡、禍害、不安、危險、墮落、混亂等の諸現象が、概ね男女の色慾に起因してゐることは争はれぬ。愛慾生活の不淨、過害を痛感して俗界を出離した釋尊

が、愛慾否定の宗教を唱導したのは當然のことである。

## 六 性的缺陷に對する原始佛教の批判

性的缺陷者にも、消極的缺陷者と積極的缺陷者とがある。性慾が病的に減退若くは缺乏してゐる者、生殖機關に障害ある者等は、何れも消極的缺陷者である。又異常に性慾の亢進してゐる色情狂、性慾が顛倒してゐる倒錯者等は、皆これ積極的缺陷者である。原始佛教が、此種の性的缺陷を如何に觀てゐるかを探るのには、極めて興味あることに屬する。今先づ消極的缺陷者に對する原始佛教の批判を述べよう。

釋尊は、此等の消極的缺陷者を以て、出家學道の資格がない者と認めてゐる。愛慾の過害を力説した釋尊が、何故に性慾及び生殖機關に障害ある者を、佛教々團から除外したのであつたか。

原始佛教の教團は、阿羅漢の聖位に到達しようと決心した少數の賢者の入るべき所であ

つて、薄志、弱行の徒の收容所ではない。志操堅固、身心健全な者でなければ、到底佛道を修行することが出来ない。然れば、支那の法欽禪師も、『出家は乃ち大丈夫の事なり、將相の能く爲す所に非ず。』と言うてゐる。性慾の缺乏してゐる者、生殖機關の不完全な者等は、健全な人間生活を営み得ない不具者であるから、到底佛道を修めて阿羅漢となり得べき機根でない。右の理由によつて、釋尊は性的不完全者と病人とを其教團に加へなかつたのである。

印度文學には、種々なる性的不具が數へてある。五種不能女、男子相婦人、牡牛女、不感女等は、女人の側に見る消極的缺陷者である。五種不能女とは、石女即ち不妊婦等の如き、生殖機關に障害を有する五種の女人である。男子相婦人とは、男子に模倣する變態的女人である。牡牛女とは、男勝りの女のことである。不感女とは、性慾に冷淡な婦人である。以上に掲げた女人は、健全な性慾生活を営むことの出来ない不具者であるから、古來結婚の資格を有せない者と認められてゐる。

次に男子の側に見る消極的な性的缺陷者には、女嫌ひな男、婦人相男子、五種不能男等がある。婦人相男子とは、男子にして女子に模倣する者である。五種不能男とは、五種の般吒即ち男根不具者であつて、五種不男、五種黃門等とも稱せられる。印度文學には、十種乃至二十種の不能男が擧げてある。此中で最も著しいのが、佛教に所謂生劇、妬、變、半の五種不能男である。第一の生不能男は、生來男根の缺けてゐる者であつて、一に扇提即ち生來不男とも呼ばれる。第二の劇不能男は、生後刀を以て男根を截られたものであつて、或は形殘黃門とも稱せられる。第三の妬不能男は、他人の姪事を目撃する時には姪心を起すけれども、然らざる時には性慾の無い者である。第四の變不能男は、盛な性慾を起して性交を試みる際、頓に男根の凋萎する者である。第五の半不能男は、一月中に於て、半月は男根、半月は女根を有し、男根の生じたる時、女人に逢へば男根が凋萎し、女根の開いた時、男子に逢へば女根が塞る如き不具者である。以上に掲げた男女の性的不具者の外に、女人にして男性に變形した變性女、一身にして男女二根を有する所謂二形者等もあ

る。

印度の諸宗教は、以上の如き性的不具者を以て、宗教生活を行ふべき能力を缺いだ者と認められてゐる。婆羅門教六派哲學の一たる數論哲學に於ては、迷位より悟位に至るまでの心狀を、疑倒、無能、喜、成就に四大別し、更に之を五十位に細分してゐる。此中、第一の疑倒は、開悟と正反對に馳せてゐる極重の迷妄である。第二の無能は、解脱の方向に進む能力を缺いだ者であつて、二十八種がある。此二十八無能の一に、身根壞とて、身根即ち生殖器の毀損を數へてゐる。婆羅門教に於ても、性的不具者を右の如く修道に不適當な部類に數へてゐる。原始佛教も、亦婆羅門教と同じく、性慾及び生殖器に障害あることを以て、過去の世に惡業を行つた應報であると爲し、斯かる缺陷を有する者は、教團に加入せしめないことに定めてゐる。日本近代の高僧たる慈雲尊者は、「十善法語」に於て次の如く説いてゐる。『此天の徳を全ふして男子の身を得るも、尊ぶべきことじや。地の徳を全ふして女人の身を得るも、尊ぶべきことじや。此徳を徳の通りに用ひ行ふて不邪淫戒となり來り、國に

在りては國治まり、家に在りては家治まるも、尊ぶべきことじや。まして不邪淫戒を護持して禪定、智慧の器となる、尊ぶべきことじや。經、律、諸論の中に、男子に五種の不能男あり、此者は齋戒を得るに堪へず、沙彌已上の位に堪へず、定慧の徳を發すること能はずとあり。緣事を擧ぐれば、律文に一人愚痴の者あり、自ら姪心の制し難きを憂へて其根を壞す。衆僧これを世尊に白す、世尊衆に告たまふ、若少分壞せば懺悔の法を教へよ、若全分壞せば、直ちに擯出せよ、根不具足の者は、解脱幢相の袈裟を著する器ならず清淨僧中に在りて、王侯、大人の供養、信心施主の禮拜を受くるに堪へずと。此に由りて知れ、根具足の丈夫たるは、宿福の在る處じや。女子の中にも、五種の不能女あり。此類は八齋戒を受くるに堪へず、沙彌尼、式叉摩那、大尼の位に堪へず、無漏道を發するに堪へずとあり。緣事を擧ぐれば、一人の石女あり、尼寺に入りて出家を願ふ、諸尼これを衆僧に白す、衆僧これを世尊に白す、世尊衆に告げたまふ、根不具足の者は、正法の中に入りて其利益なし、未だ出家せずば出家せしむべからず、若已に出家し了らば直



ちに擯出せよ、彼類の者は、解脫幢相の袈裟を著する器ならず、清淨尼衆の中に在りて王公、大人の禮拜を受け、信心施主の供養を受くるに堪へずと。此に由りて知れ、女人も根具足せるは、宿福のある處じや、是等は甚深なるじや、庸流の解し難き所じや。何故なれば、無漏大道は人間諸根の中に顯れ、四肢、百骸の中に具はる。菩薩の行願、諸佛の方便は、現今人事の中に満足し、生死世界の中に具はる。男子ならば男子にて根具足せざれば、天の徳を全くすることはならぬ。女子ならば女子にて根具足せざれば、地の徳を全くすることはならぬ。此天地の徳を備へ、人の人たる道を全くせし上に、法器にもなるべく、人天の師位にも至るべきことじや。又佛在世に、二形の者有りて出家を願ふ、此を世尊に白す、世尊衆に告給ふ、此類我法の中に入るとも其利益なし、未だ出家せずば出家を許さざれ、既に出家せば早く擯出せよ、彼等諸戒を得るに堪へず、定慧を發するに堪へず、清淨衆中に在りて、王侯、大人、信心施主の禮拜、供養を受くるに堪へずと。此二形に三種の差別ありと云ふが、二種共に天の徳を破り、地の徳を傷ふ

法の器ならず。』

又「善惡因果經」と題する僞經には、『人と爲り男根具足せざる者は、猪狗を韃する中より來る。』とある。韃するとは、去勢することである。同經には、女根不具の原因を左の如く示してある。

『佛言はく、人と爲り、塔を破り寺を壞り、三寶の物を隠藏して己が用と作す者は、死して阿鼻大地獄の中に墮し、地獄より出でて畜生の身を受く。……若し人身を得ば、黃門形の女人と二根と無根と姪女とを受く。』

性の消極的缺陷者に對する原始佛教の思想は、大略以上の如くである。次には、原始佛教が、性の積極的缺陷者たる色情狂、邪姪者等を如何に觀てゐるかを探らう。

佛教に於ては、色情亢進、性慾顛倒、性的不道德、色慾耽溺等の如き不正な性慾、性交を、邪姪と總稱してゐる。出家の男女は、性交を絶對的に禁斷せなければならぬから、正姪、邪姪の問題も起らない。然し、家庭に在る男女に對しては、性慾を禁斷することが出

來ないから、釋尊も之に正姪を許し、邪姪を禁じてゐる。正姪と邪姪との判別は、重大にして且つ嚴肅な道德上の大問題であるから、律藏中の一聖典にも、姪戒の相を演説する時、若し笑ふ者あらば之を擯出せよと規定してある。佛教に於ては、男性を邪姪の主犯者と認めてゐる。小乗佛教の一聖典たる「俱舍論」には、非境、非道、非處、非時、一に該當する性交は、何れも邪姪と定めてある。非境とは、正當ならざる性的對象を謂ふのである。若し、男子が未開の童女、月經期の婦人、齋戒中の女子、淨戒の比丘尼、實母、姉妹、近親の異性、他の妻妾、同性の男子、性的不具者、獸畜等と性交をなす時には、非境に對して邪姪を行ふたことになる。殊に、母と阿羅漢尼とを汗すことは、五逆罪中の殺母罪に準すべき極惡罪とせられてゐる。印度の古代法典に於ても、師の妻を犯した者を、五逆罪の一に數へてゐる。次に、非道とは、正當の生殖機關に非ざる局所を意味する。非處とは、佛寺、僧房、道路、塚間等の如き、醜行を演ずべからざる場處を意味する。非時とは、六齋日、十齋日、父母の諱日等の如き、謹慎すべき日時を言ふのである。要するに、世間の道德と習慣、國

家の法律、宗教の戒法等に觸れた性交は、何れも悉く邪姪である。是の故に、受戒、月經、授乳の時期に於て、自妻と交ることも、邪姪の大罪である。但し、言語を以て戯れ、物を與へて歡心を求め、或は握手、觸體等の行爲をなしても、性交を遂げない時には、邪姪罪を構成せぬ。右の如くに、釋尊は左家の男女に對して、性的徳道を嚴守すべきことを要求し、處女性及び母性の尊嚴を維持するに努めたのである。尙佛陀は、邪姪の罪報の如何に恐るべきかを説き、斯かる罪惡の發生を豫防しようと努めてゐる。

## 七 在家の女人に對する原始佛教の教化

一切の男女を、棄欲出家せしめるのが、原始佛教の本意であつた。然し、愛慾に執着してゐる凡愚を、悉く出家生活に入らしめることは、到底望み得べからざる所である。又佛教に篤信を抱いた者の中にも、事情によつて出家の出來ない者が多數あつた。それ故、釋尊が教團内に閉ぢ籠り、俗界と全く絶縁したならば、佛教の感化は社會の一局部にしか及ばないこ

とになる。茲に於てか釋尊は、左家の男女にも佛教の歸依者たることを許し、それらの人々に、簡男な第二義的修行法を授けた。佛、法、僧の三寶に歸依した世俗の男子は、優婆塞即ち清信士と名けられ、その女人は優婆夷即ち清信女と呼ばれた。信徒となるには、比丘の前に於て三寶に歸依し、終生嚴守すべき五戒を受けなければよいのである。佛陀が、これら世俗の信徒に對して試みた説法は、聖典の諸部に記せられてある。

巴利語の「大般涅槃經」には、誠實の五得と不誠實の五失とに關して、俗人に與へた教訓が記してある。釋尊が、在家の信徒に授けた戒法は、不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五條であつて、之を五戒又は優婆塞戒と稱する。佛陀が、斯かる禁戒を立てたのは、止惡、行善を勧めるためである。釋尊は又俗人のために十惡を斷除すべき十善戒をも説いてゐる。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語、不貪欲、不瞋恚、不邪見が、所謂十善戒なるものである。此十善戒中、不殺生、不偷盜、不邪淫の三戒は、身によりて犯す三惡業を防ぎ、不妄語、不兩舌、不惡口、不綺語の四戒は、口によりて犯す

四惡業を止め、不貪欲、不瞋恚、不邪見の三戒は、意の上に犯す三業を遮るものである。五戒及び十善戒は、人たる道を全くするために、俗人の守るべき戒法であるから、之を世間戒とも稱する。今十善戒を略説すれば、第一の不殺生戒は、慈悲、博愛の心を養ふために立てたものである。第二の不偷盜戒は、他人の與へざる物を盜むなどいふ戒法である。第三の不邪淫戒は、夫妻各性的道德を嚴守し、相敬し相親み、以て人倫を全うすべしといふ道德律である。一男と一女とが、相互の自發的戀愛に基いて正當に結婚し、良心、理性の命令を奉じて、正しい愛慾生活を營む事が、此不邪淫戒の精神に合するのである。釋尊は、一夫一妻(Monogamy)のみを合理的夫婦關係と認め、一妻多夫(Polyandry)一夫多妻(Polygamy)乃至近親相姦、姦通をば、邪淫の大罪として極力排斥してゐる。偽經ではあるが、古來佛徒の重むじてゐる「善惡因果經」には、『今身に多くの婦を畜ふ者は、鐵磔地獄に墮つ。』『今身に多くの夫主を畜ふる者は、死して青蛇地獄の中に墮つ。』『人と爲り、喜んで他の婦女を姦する者は、死して鴉鴨の中に墮つ。』『人と爲り、喜んで九族の親を姦する者は、死して雀

の中に墮つ。』等と説き、邪淫の罪報の如何に恐るべきかを示してゐる。又「五通經」にも、『人と爲り、喜んで他の婦女を姪する者は、死して地獄に入り、男は銅柱を抱き、女は繩牀に臥し、後に姪色鵝鴨鳥の中に墮つ。』とある。其他「薩遮尼乾子經」の中には、男子に姪通を誓めた次の偈がある。

『自妻不<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>足 好<sub>レ</sub>姪<sub>レ</sub>他<sub>レ</sub>婦女』

是<sub>レ</sub>心無<sub>レ</sub>漸<sub>レ</sub>愧 受<sub>レ</sub>苦常無<sub>レ</sub>樂』

第四の不妄語戒は、誠實ならざる言辭を發する勿れといふ禁令である。第五の不兩舌戒は他人を離間する如き言辭を發する勿れといふ禁令である。第六の不惡口戒は、麤暴なる言辭を放ちて他人を罵詈、輕賤する勿れといふ禁令である。第七の不綺語戒は、戲謔、雜穢の言辭を放つ勿れといふ禁令である。第八の不貪欲戒一名不慳貪戒は、欲望を恣にするこゝと勿れといふ禁令である。第九の不瞋恚戒は、忿恨の念を起すこと勿れといふ禁令である。第十の不邪見戒は、邪說、迷信を奉ずる勿れといふ禁令である。以上の十戒を受持す

る時には、殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪欲、瞋恚、邪見の十惡業を離れて、止惡の消極的の道德を全うするのみならず、更に進んで作善の積極的の道德に到り得るのである。

右に擧げた五戒及び十善戒は、在家の男女が終身受持すべき戒法である。此外、在家の男女が、一日一夜を限つて受持すべき、出家の戒法たる八戒齋が設けてある。此八戒齋は、次に示すが如く八戒と第九不非時食の一齋とから成つてゐる。

(一) 生命を害せず。 (第一不殺戒)

(二) 與へられざるを取らず。 (第二不盜戒)

(三) 非梵行〔姪〕せず。 (第三不姪戒)

(四) 虛誑語〔妄語〕せず。 (第四不妄語戒)

(五) 諸の酒を飲まず。 (第五不飲酒戒)

(六) 香華鬘を著けず、香を身に塗らず。 (第六不著香華鬘不香塗身戒)

(七)歌舞、倡妓、往きて觀聽せず。(第七不歌舞倡妓往觀聽戒)

(八)高廣、嚴麗の牀座に眠座せず。(第八不坐高廣大牀戒)

(九)非時に食せず。(第九不非時食戒)

此八戒齋は、毎月六齋日に、長老の比丘の所に往きて受くべきものであつて、受戒期間には、夫婦の愛慾をも斷たなければならぬ。

佛教以前に起つた數論學派に於ても、佛教の五戒と相似た不殺、不盜、實語、梵行、無諂曲の五戒法を定めてゐる。又佛教と殆んど同時に起つた耆那教に於ても、不殺生、不妄語、不偷盜、梵行、棄欲を、出家の弟子の五誓戒となしてゐる。梵行とは、性慾を禁斷することである。佛教を信奉する在家の男女は、右に述べた五戒、八戒齋、十善戒等を嚴守して、諸惡を遠離せねばならぬ。又佛教々團に加入した出家の男女たる比丘、比丘尼は、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八聖道を完修して、最高の聖者たる阿羅漢の位に進まねばならぬ。然るに、在家の佛教徒中、八聖道を實修して阿羅漢と成つ

たものもある。巴利語の一聖典「增一部」には、阿羅漢の聖位に入つた二十一人の在家佛教徒を擧げてゐる。

釋尊は、前記の諸戒を制定して、在家の男女に道德の軌範を示した外に、尙婦人が家庭に於て實行せねばならぬ諸の美德を教へてゐる。原始的聖典の一たる「六方禮經」に於て、釋尊は『夫の婦を視るに五事あり、一には出入當に婦を敬ふべし。二には之に飲食せしめ、時節を以て衣被を與ふべし。三には當に金銀、珠璣を給すべし。四には家中に所有の多少を、悉く用て之に付すべし。五には外に於て邪に傳御を畜ふることを得ず。』と説いて、夫たるものの義務を示し、更に、『婦の夫に事ふるに五事あり。一には夫外より來らば、當に起ちて之を迎ふべし。二には夫出でて在らざれば、當に炊蒸、掃除して之を待つべし。三には心を外夫に姪することを得ざれ。四には當に夫の教戒を用ふべく、所有の什物を藏匿することを得ざれ。五には夫休息せば、善く藏して乃ち臥することを得。』と説いて、婦徳を教へてゐる。是の例に依つても、釋尊が女性教育、家庭生活、夫婦道德等に十分の注意を拂

うたことを知り得る。又「七女經」及び巴利語の「大般涅槃經」等には、美女たるの條件が、肉體美に存せずして、精神美に在ることを力説してゐる。釋尊の教化を受けて信仰生活に入つた優婆夷（清信女、清淨女、信士女、近佛女、近士女、近事女等と譯す）の中にて、毘舍佉夫人、韋提希夫人、善生夫人、末利夫人、勝鬘夫人、賣笑婦菴羅婆利等は、特に有名な婦人である。此中、長者の妻であつた毘舍佉夫人は、舍衛城の東園に鹿子母講堂を建てて釋尊に奉獻し、又佛教々團の擁護に盡した。此夫人は、優婆夷中智慧、辯才第一にして阿那含と呼ぶ聖位に入つたと傳へられる。次に韋提希夫人は、摩揭陀國頻婆娑羅大王の夫人である。善生夫人は、祇園精舎を釋尊に寄附した須達多長者の夫人である。末利夫人は、憍薩羅國波斯匿大王の夫人であつて、深く佛道に悟入したと傳へられる。勝鬘夫人は、波斯匿王と末利夫人との間に生れた賢女である。菴羅婆利は、吠舍離城の富み且つ美しい娼婦である。彼女は基督に熱愛を捧げたマグダラの娼婦マリアにも比すべき敬虔な善女人であつた。釋尊が、吠舍離城に來て、菴羅婆利の所有する果樹園に留つてゐるのを聞いた時、彼女

は、釋尊を訪ふて敬意を表し、翌日自邸に釋尊及び諸弟子を招いて大供養を行ひ、且つ果樹園を佛陀の教團に寄附した。釋尊は、罪障深い娼婦の布施をも嘉納して、一時その果樹園に止住してゐた。彼女は、老年に及むで實子の説法を聞いて出家し、諸行無常、諸法無我の妙理を悟つて、阿羅漢の聖位に進んだと傳へられる。彼女の作に係る十九偈が、巴利語の「長老尼偈」中に存在する。

## 八 出家の比丘尼に對する原始佛教の教化

無明、煩惱の雲を拂うて、無我の眞理に徹底するのが、原始佛教の理想であつた。無我の境地に到つて阿羅漢となれば、男子は男性を失ひ、女子は女性を失ひ、共に平等の靈的人格となるのであるから、性慾の存在すべき餘地がない。釋尊は、三十五歳の時一切の煩惱を斷滅し得たから、愛慾に悩まされることは絶對的になかつた。然し、出家して佛陀の教團に加入した比丘及び比丘尼の中には、愛慾の斷ち難いのに苦んだものも多かつた。殊に

青春の血の燃えてゐる若い比丘、比丘尼、沙彌、沙彌尼等は、湧き出づる情欲を抑へようとして、何んなにか苦しんだことであらう。年少の比丘の中には、策盡きて男根を斷ち切つた者さへある。斯かる悲痛な事件が起る度毎に、慈愍の深い釋尊は、一々懇切な示教を垂れてゐる。或時一人の比丘が、淫心の抑へ難いのを患ひて、自ら其陰を斷たうとしたことがある。其時釋尊は、陰を斷つよりは心を斷て、邪心が止まなければ、如何に陰を斷つても何等の功德がないと戒め、情欲を禁壓することに費す努力を以て、精神の修養に轉用せよと教へた。又釋尊が舍衛城に在つた時、四人の比丘が樹下に集つて、人生最大の苦痛は何であらうかと論議してゐた。釋尊が其處に至つて、四比丘に感想を問うた時、甲の比丘は欲姪を、乙の比丘は飢渴を、丙の比丘は瞋恚を、丁の比丘は驚怖を、人生の最大苦痛として擧げた。其時釋尊は、『汝等苦の本を究めず、天下の苦、身あるに過ぎたるはなし』と説き、生死の迷界に身を受けてゐる限りは、これらの諸苦に悩まされるのが運命であるから、涅槃の道に精進することを第一にせよと教へた。釋尊は、出家の男子たる比丘に對しては、女人と接

近しないやうに勧めた。巴利語の「大般涅槃經」第二章には、次の如き對話が記してある。

『阿難陀尊者問ひて曰く、世尊よ、女人に對して我等が如何に身を處すべきかを教へ給へ。佛陀曰く、女人を見ること勿れ。阿難陀重ねて問ひて曰く、設し既に見たりとせば、如何に身を處せむ。佛陀曰く、共に談ること勿れ。阿難陀更に問ひて曰く、女人が既に談れる時、之を如何にせむ。佛陀曰く、專心に戒慎せよ。』

然し、比丘中には、婦人に關する問題を惹き起したのも多かつた。釋尊が比丘、比丘尼のために制定した戒律中、最初に設けたのも不邪淫戒であつて、次の如き因縁に基いてゐる。印度の迦蘭陀村に、四十億の資産を有する富豪があつた。此人は、國王から長者の位を賜はつたので、迦蘭陀長者と呼ばれてゐた。長者の子の須提那即ち善財は、釋尊成道の第十二年に、出家して佛道に入つた。須提那は、八年間他國に在つて佛道を學むだ後に、その故郷へ歸つて來た。彼は家庭のことが氣になつたので、釋尊の許可をも得ずに我家に歸つた。家に残つてゐた母と妻とは、非常に歡むで彼を迎へた。老母は、一子を得て家系を續がしたい

との熱望から、須提那を妻の閨中に入らしめた。女犯の大罪を犯した須提那は、懺悔の涙を流しつつ教團に歸つて來た。其時釋尊は、『威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、不應爲の行なり。』と須提那を叱責し、諸の比丘に對して、『須提那は愚痴の人にして、諸漏の門を開けり。汝等諸人、男根を以て毒蛇の口中に置くとともに、女根中に留めざれ。』と宣告し、終に不邪淫戒を制定した。

釋尊は、初め精細な戒律を制定しなかつたのであるが、後に佛弟子中に威儀、品行の正しからぬ者が現れたので、犯罪の起る毎に輕重の諸戒を設けるに至つた。佛滅當時には比丘の守るべき諸戒の数が二百有餘、比丘尼の守るべき諸戒の数が三百有餘に達した。彼の具足戒なるものは、釋尊制定の戒法に多少の修正を加へたものである。比丘即ち男僧の守るべき具足戒は、二百五十條より成り、其中、殺生、偷盜、姪、妄語は、極重罪とせられてゐる。

釋尊は、比丘尼即ち女僧の教育に關して、非常に苦心を費した。愛執の強い女人を、如

何にすれば無我の阿羅漢となし得るかといふことには、流石の釋尊も、非常に頭を悩ましてゐた。今釋尊が如何なる方法を以て、其理想とする無我的婦人を造り出さうとしたかを考察しよう。

釋尊は、もと出家の男子たる比丘を教養するために、その教團を組織したのである。然るに、養育の大恩を受けた叔母生主夫人に懇請せられた結果、成道第五年に至つて比丘尼の教團を設けた。釋尊が最初女人を教團に入れなかつたのは、女人のために教團の威儀が紊されることを憂ひたからである。比丘尼の教團が設立された時、釋尊は阿難陀尊者に向つて、『若し女人を教團に入れなければ、佛陀の正法が一千年世に行はれるが、女人を入れたために五百歳に減じた。』と歎息した。生主夫人の盡力によつて、女人の教團が成立したから、生主を始め五百の婦人が、一時に出家して比丘尼と爲つた。巴利語の律藏聖典の一たる「小品」には、之に關して左の如くに記してゐる。

『斯くして比丘尼の教團は設立せられ、彼此の地、聚落、城邑、僻遠、王城に於て、次第



に其數を増大せり。佛、法、僧の殊勝なることを聞きし、主婦、養女、處女は、微妙なる佛陀の教法に隨喜し、生死、輪廻の厭ふべきことを感じて、聖衆の中に加はれり。』  
又リス・デギツ夫人は、「佛教評論」誌上に於て、次の如くに論じてゐる。

『佛教の力によりて、子を失へる母及び子なき寡婦は、悲哀と悔蔑とを免れ、娼婦は良心の呵責より救はれ、王妃及び貴女は、放恣なる生活の倦怠を忘れ、貧婦は心勞及び苦役を脱し、處女は最高價を提供する求婚男子に賣らるるの屈辱を免れ、賢女は理智の發達を拘束せし傳統より放たれたり。』

斯くして佛教々團に女性が加入した結果、未悟の比丘は往々比丘尼に愛著心を起した。マラ族出身の一比丘尼は、途上一比丘に凌辱せられようとしたので、怒つて其比丘尼を毆打したことがある、そこで釋尊は、比丘、比丘尼の嚴守すべき教規を制定し、教團の威儀を保つことに苦心した。左に比丘尼が學道する次第を述べよう。

新に入團した婦人は、佛陀若くは長老の前に於て、歸依佛、歸依法、歸依僧の所謂三

歸なるものを三誦し、十戒を授けられて、室利摩拳理迦即ち沙彌尼となるのである。沙彌尼とは勤策女、求寂女を意味し、諸の煩惱を斷じて涅槃に趣かうと勤修策勵する女性を呼ぶ名である。沙彌尼は、沙彌と同一の十戒即ち沙彌戒を嚴守しなければならぬ。沙彌戒といふのは、前に述べた八戒齋(九戒)に、第十の不捉金銀寶戒を加へたものである。沙彌尼となつた女子は、鬚髮を剃除し、且つ身に袈裟を着けねばならぬ。沙彌尼の修行を終つた者は、式叉摩那即ち學法女(正學女、學士女等とも譯す)となり、二歳の間次の三法を研究せなければならぬ。

(一)根本罪惡、即ち殺、盜、姪、妄語の四重禁。

(二)學法女の爲に特定せられた六法。

(三)行法、即ち大尼の諸戒及び威儀。

右の三法中、學法女の特に學ぶべき六法といふのは、次の如き六禁である。

(一)『染心相觸』即ち汚れたる心を以て身體を接觸すること。

(一)『盜四錢』即ち四錢を盜む軽い偷盜罪。佛教流布の中心地たりし王舍城に於ては、五錢を盜めば重罪と認められてゐた。

(二)『斷畜生命』即ち動物の生命を害する軽い殺生罪。

(三)『小妄語』即ち輕微な妄語罪。

(四)『非時噉食』即ち日中を過ぎて食事すること。

(五)『飲酒』即ち酒類を飲用すること。

これらの宗教的罪惡を研究し、之に觸れない修養を積むのが、學法女たる者の本務である。十八歳の童女は、學法女となることが出来る。既に結婚してから後に、家庭を厭うて出家した女子は、十歳にして學法女となり得る。斯くて二年間學法女の修行を積み、心身が清淨になつた時には、三百四十八條より成る比丘尼の具足戒を受けて、比丘尼即ち大尼となるのである。されば、十八歳にして學法女となつた童女は、二十歳に達すれば比丘尼となり得る。又十歳にして學法女となつた既婚の婦人は、十二歳にして比丘尼となり得る。

比丘尼の受持すべき三百四十八戒は、八種の波羅夷罪、十七種の僧殘罪、三十種の捨墮罪、一百七十八種の單提法、八種の提舍尼法、一百種の應當學、七種の滅淨法に七大別せられる。此中で、波羅夷罪は、殺生、偷盜、姪、妄語等の八種の根本極惡罪であつて、之を犯した者は、永久に教團から破門せられる。性交もこの重罪の一であるから、釋尊は、『女人にして出家の道を求むる者は、陽欲を滅斷すべし、しかすれば陰氣盡く。』と教へてゐる。僧殘罪は、僧會の決議を経て一時擯斥せられるが、決議を経て再び歸來を許される罪である。捨墮罪は、謹慎若くは懲戒に處せられる罪である。單提法は、懺悔によりて償ひ得る輕罪であり、提舍尼法は、自白によりて滅する微罪である。應當學は、日常生活に於て守らねばならぬ威儀、作法等である。滅淨法は、教團の論評を判定する規矩である。比丘尼は、これらの戒法を犯さないやう、常に細心の注意を拂はねばならぬ。尙此大戒の外に、比丘尼が比丘に對して實行すべき、八尊敬法なるものも規定せられてゐる。比丘尼たる者は、右の戒學と併せて、定學及び慧學を完修しなければ、無我の眞理に悟入することが出来ない。定學

は、禪定を修習することであり、慧學は聖智を開發することである。戒、定、慧の三學を完修して學徳の進歩した比丘尼は、テーリー即ち長老尼と尊稱せられる。原始的原始小乘佛教の修道法によつて、如何なる型の理想的女人が養成せられたかは、次に之を述べることにする。

### 九 原始佛教の理想とせる女人

原始佛教に於ては、諸の比丘、比丘尼を訓育して、性セツクの意識なき無我の境地に到らしめることを目的となしてゐる。その結果として、性の意識を超越した幾多の比丘、比丘尼が現れたのは當然である。左に示すのは、巴利語の一聖典に記せられてゐる、性の觀念を脱離した比丘の一例である。

『尊者よ、是道を歩める女人を見ずや。長老比丘之に答へて曰く、是道を過ぎ行きし人の、男か女かを吾は談り得ず。吾はた、骨の一聯のこの道を動きしを知る。』  
又チャンダナと呼ぶ青年は、一子を生むだ後に出家して林中に住むてゐた。家に残され

た妻は、思慕の餘り、墓林に靜坐してゐるチャンダナ阿羅漢を尋ねて行き、百方還俗を促した。然し、此阿羅漢は、毫も愛著心を起さなかつたといふ。

諸の比丘尼の中にも、性の觀念を脱却して聖者の地位に進むだ者が、釋迦在世の時に多數あつた。釋尊の養母たる生主比丘尼、釋尊の舊妃たる耶輸陀羅比丘尼等は、何れも堂々たる長老尼である。又蓮華ウツパラッナルナ色比丘尼の如きは、六神通を得、且つ阿羅漢道に入つて女聖である。又波斯匿王の女たる識摩クシニヤ比丘尼は、大比丘尼中の上首と仰がれてゐる。七子を失うて出家した機梨舍クワシヤ彌ガウクマ比丘尼は、持律第一と稱せられた大阿羅漢である。

原始佛典には、眞理に悟入した女聖に關する記事が豊富に存する。巴利語の「サツカ問經」第二章には、五頂と呼ぶ音樂の神が、釋尊に談つた次の物語を記してゐる。

『迦毘羅城にゴーピカーゴピカ(女名)と呼ばれし釋迦族の一女ありき。三寶に歸依して佛道を勤修し、女念を棄てて男念を懷きしが故に、命終の後善處に生れ、我等と同じく天帝の子として、三十三神と伍することを得たり。今天界に於てゴーバカゴバカ(男名)と呼ばれる神子は、

彼れゴビカーの後身なり。』

又巴利語の「大般涅槃經」には、欲界の五欲を斷滅した難陀比丘尼が、死後最高の天界に生れて、不來果と呼ぶ聖位に入つたことを記してゐる。

聖位に進んだ諸の長老尼は、教團の一員としては、比丘の次位に在るけれども、悟道の聖者としては、諸の比丘、比丘尼から無上の尊敬を拂はれてゐた。これらの長老尼の作に係る偈頌（カハ）即ち聖詩を集めた巴利語の「長老尼偈」の中には、長老尼等の無我的若くは超性的性格が躍動してゐる。次に示すのは、「長老尼偈」の中の一偈である。

『欲樂を談りて、我を喜ばさむとなす勿れ。斯かる假樂は、今やわれに感興を起さしめず。』

涅槃の妙理を體驗して無我の聖域に進むだ比丘、比丘尼は、既に普通の男性、女性ではなく、性の觀念を超越した一味の靈的人格 (Spiritual manhood) である。此境地に於ては、男子も男性を超越し、女子も女性を脱却してゐる。されば釋尊も、涅槃の境地には性的差

別相 (Sexual differentiation) が存在しないと認めてゐる。

然し、地上に於ける一切の男女が、皆悉く釋尊の宗教を實修し、性的本能を脱却して無我的な聖者となつたならば、人種は如何にして存続することが出来るであらうか。若し一切の衆生が、最高の涅槃生活に入つたために、人種が絶滅したとするならば、それは肉に對する靈の勝利として慶讃すべきことであるといふのが、恐らく釋尊の懐いてゐた信念であらう。若し諸の衆生が、佛道を修行して佛界に入るとすれば、衆生界は漸減し、佛界は漸増するのであらうか。又其結果、衆生界は斷滅するに至るのであらうか、といふ所謂佛界衆生界増減論は、古來佛教哲學上に於ける重大、至難な一問題である。原始佛教は、疑もなく現實生活を否定してゐる。然るに、大乘の新教に於ては、現實に即して理想生活を創造すべきことを力説し、餘りに非人間的であつた佛教を、人間本位に改造しようと努力してゐる。

女人を性慾、煩惱の束縛から解放し、性の觀念を超越した靈格に進化せしめようとした釋尊の主張は、シヨーベンハウエル氏、トルストイ氏、ワイニンゲル氏等の女性觀と、一

脈の相通する所を有する。ワイニンゲル氏は、釋尊と同じく、性慾に何等の美的價値を認めず、且つ性交を不道德的行爲と認めてゐる。氏が、其著、性と性格に於て吐露してゐる説に従へば、如何なる男子も、女子を以て方便、手段となし、快樂その物を第一位に置き、自己及び異性の人格的價値を第二位に置くのが事實であるから、性交は全然不道德であるといふことに歸着する。氏は尙同書に於て、次の如くに論じてゐる。

『女子自身が、男子のための目的物及び資料たることを辭したる時、男子は初めて女子を敬重して可なり。……眞に其性的自我を放棄し、平安を得ることを希望せる女子は、既に女子に非ざるなり。女性たることを自廢せし婦人は、必ずや更生の内的、靈的、外的の徵候を受けたるならむ。……生存問題、罪惡觀念等を體驗せむと望むことは、果して婦人に可能なりや。婦人は眞に自由を欲求するものなりや。こは婦人が其目標の星と仰ける理想に浸りし時にのみ起り得べし。又女人の解放は、斯かる方向に於てのみ存在し得べし。』

原始佛教の教團に見る阿羅漢尼は、氏の言へるが如き『女性を脱却した婦人』に外ならぬ。ハーン氏(Hahn)が、『絶對的禁欲乃至去勢等の方法によりて、性的情緒を抑制せる場合には、其性的情緒は、更に奥妙なる形を取りて心靈界に向つて進む。』と説いてゐる如く、單なる禁欲でさへも、靈能を發揮せしめる力を有する。況してや、佛教の比丘、比丘尼の如きは、戒律と併せて、禪定、智慧をも鍛鍊するのであるから、性慾を脱離して無我の聖境に到り得ることは當然である。

自己の青年時代の生活を描いた小説「コサツク」によつて知り得られる如く、トルストイ氏は、若き時より肉慾に感溺し、性慾の威力を痛感した結果、老年に於ては禁欲主義を唱へるやうになつた。氏は、自作の小説「クローイチエル・ソナタ」(Krüger Sonata)の序文に於て、人間の靈化が人生最高の目的であるといふ人生觀から、肉慾を以て、吾人の理想に進むのを妨げる障碍となし、此理想が實現されるならば、人種は絶滅しても可いと説き、又理想の實現を妨げる性慾を斷滅して、男女兩性は同胞の如くに交らねばならぬが、實現するに足るべ

き完全な子孫を得るまでは、結婚を否認する譯に行かないと論じてゐる。基督の使徒パウロも「コリント前書」第七章に於て、『汝らが我に書きおくりし事に就きては、男の女に觸れぬを善しとす。然れど淫行を免れんために、男はおのおの妻をもち、女はおのおの其の夫を有つべし。』と説き、尙ガラテヤ書第三章に於て、信仰生活に入れる男女が、神の子として平等であることを示してゐる。パウロの女性観は、釋尊のそれと多くの類似を有してゐる。パウロは、尼僧と結婚したマルチン・ルーテルなどと異り、童真にて出家した佛教の比丘の如く、終世結婚しなかつたのである。今より數十年前、奧地利人フルリツチが唱へ出した中性者なるものと、佛教に於ける無性的聖者とは、全く異つてゐるのである。所謂中性者なるものは、女體にして男魂を有する女子、男體にして女魂を有する男子の類であつて、何れも性慾を有し、同性愛に陥る者も往々ある。之に反して、佛教の聖徒は、男體たると女體たるとに關らず、如何なる性をも超越してゐるのである。

## 十 大乘佛教の女性觀及び愛慾觀

西曆紀元前第二世紀の頃から、原始的Primitive小乗佛教と趣を異にした大乘Mahayanaと名ける新佛教が、印度に起つた。舊教たる原始佛教に於ては、無我の眞理を體驗して阿羅漢と成ることを目的とし、佛陀は阿羅漢中の最大者にして、釋尊一人のみであると信じてゐた。然るに、大乘佛教に於ては、大我の妙理を覺つて佛陀と成ることを理想とし、菩提心を起して衆生を教化する菩薩の願行を勧めてゐる。小乗の學徒は、出家して自己の解脱を求め、急務とし、他人を救済することを慮る暇がないが、大乘の菩薩は、廣大な慈悲、智慧、信念を以て一切衆生を救ふことを主眼とし、必ずしも捨家、棄欲して一切の恩愛を斷つことを必要としない。又小乗教の聖者は、現世、欲望、煩惱の外に超然として立つてゐるが、大乘の菩薩は、崇高な活動意思によつて現實界の淨化に努力してゐる。又小乗の涅槃は、消極的であるが、大乘の涅槃は積極的である。小乗の聖者は、涅槃界から現實界に歸來しないが、大

乘の菩薩は、佛陀となつた後にも、種々なる姿を現じて苦惱の衆生を救はうとする。戒律に於ても、小乗教は峻嚴であるが、大乘教は寛容である。又大乗の菩薩は、權力、財寶、妻子の所有者たることが出来る。然し、大乘教と雖、教團の規律を弛めたのではなく、偏固な形式主義を棄てたまでのことである。大乘教に於ては、快樂そのものを目的として追求することを許さないが、偶然的に發生した快樂を故らに斥けもしない。哲學思想に於ても、大乘教は高遠な唯心論に立脚し、眞如と名ける唯一最高の實在を認め、眞如は、法性即ち宇宙的原理たると共に、一切衆生の眞我たる心靈的原理であると認めてゐる。「大般涅槃經」には、『一切の衆生に悉く佛性あり。』と説き、八十卷譯の「華嚴經」には、『一衆生として如來の智慧を具足せずと云ふことなし。但し、妄想、顛倒、執着を以て而も證得せず。若し妄想を離れぬれば、一切智、自然智、無碍智則ち現前することを得。』と説き、吾人が佛性を開顯する時には、必ず成佛し得ることを保證してゐる。大乘に於ては、靈的要求にのみ走る者も、肉的欲求にのみ走る者も、共に誤つてゐると認め、靈肉一如の大我的生活を理想とし、『頌

偈即菩提、生死即涅槃』若くは『不斷煩惱而入涅槃』等と説いてゐる。羅摩經には、『佛は増上慢の人の爲に姪、怒、痴を離るるを説て解脱と爲すのみ。若し増上慢なき者には、佛、姪、怒、痴の性、即ち是れ解脱なりと説く。』とある。「大智度論」には、『姪欲即ち是れ道、患、痴亦是の如し。』とある。此靈肉一如主義は、一步誤れば現實主義、快樂主義、耽溺主義となるから、大乘教聖典に放ても、小乗教と同じく、女人、愛慾の不淨を力説してゐる。以上の略述によつて推知せられる如く、大乘佛教の出現は、佛教が狭い教團の範圍を越えて實世間に溢れ出でたことを意味する。斯かる新佛教の宣揚に貢献した聖哲の代表者は、紀元第一世紀の馬鳴菩薩、第二世紀の龍樹菩薩等である。小乗教が、歴史的、倫理的であるのに反し、大乘教は、非歴史的、神話的、哲學的である。隨つて、大乘教の聖典は、歴史的事實を記したのではなく、後世の哲人が、佛説に假託して創作した一種の宗教的小説に外ならぬ。今これら的大乘聖典に現れた女人觀及び愛慾觀を略述しよう。大乘教は、靈肉一如主義ではあるが不純な愛慾生活に對しては、小乗教と同一の銳鋒を以て破折を加へてゐる。例

へば『大菩薩藏經』には、次の如き教誡がある。

『舍利弗よ、當に知るべし、婦人は是れ衆苦の本なり、是れ障重の本なり、是れ殺害の本なり、是れ繫縛の本なり、是れ憂愁の本なり、是れ怨寇の本なり、是れ生盲の本なり。當に知るべし、婦人は聖慧の眼を滅することを。』

龍樹菩薩作の『大智度論』には、次の如く説いてゐる。

『寧ろ熱鐵を以て眼中に宛轉するとも、染心を以て邪に女色を見ざれ。笑を含みて姿を作り、僞慢・羞慚なり。面を廻らして眼を攝め、言を美しくして妬み瞋る。行歩妖穢にして以て人を惑はす。姪羅の彌網には人皆身を没す。坐臥・行立・廻眄して巧に媚ぶ。薄智愚人、之が爲に醉はさる。劍を執りて敵に向ふ、是れ猶勝つ可し。女賊の人を害する、是れ禁す可からず。蜈蚣毒を含む、猶手を以て捉へつ可し。女情の人を惑す、是れ觸るる可からず。』

尙同書には、『衆病の中に女病最も重し。』女鎖の人を繋ぐ、染固く根深し、無智之に没す

れば、脱するを得べきこと難し。』等と説き、女色を疾病、鐵鎖・盜賊に比してゐる。又『諸經要集』には、次の如くに説いてゐる。

『在家の俗女は、毒多過なり。近づくときんば、國を失ひ家を破る。觸るるときんば、蛇を把るが如し。外の言は蜜の如く、内の心は鳩の如し。食ることも之に因り、苦も皆女人に由る。外に於て身を喪すも亦女人に由る。室家の和せざるも亦女人に由る。男女の反逆も亦女人に由る。兄弟の離散も亦女人に由る。惡道に墜墮するも亦女人に由る。』

又或經には、『女人は地獄の使にして、能く佛の種子を斷つ。外面は菩薩に似たれども、内心は夜叉の如し。』とある。更に『大般涅槃經』には、『有らゆる三千界の男子の諸煩惱、合集して一りの女人の業障となる。一々の毛孔中より、恒に諸の欲火を出し、念念善根を燒くが故に、親近すべからず。』とある。又『心地觀經』には、『毒蛇の口は一身を害するも、女人は能く法身を害す。』と説いてゐる。又『佛說玉耶女經』には、女人に三障、十惡あることを示してゐる。此等の教説は、一切の凡夫及び菩薩を、煩惱生活に墮落せしめない爲に發した



警告に外ならぬ。女人にも佛性がある以上は、必ず成佛し得るものであることを、諸の大乗經は十分に闡明してゐるのである。

### 十一 性的缺陷に對する大乘佛教の批判

慈悲を最高道德とする大乘佛教は、生殖器の不具な者に對しても、非常に寛容な態度を示し、從來學道の資格なきものとして排斥せられてゐた、生殖器なき無根者、男女の生殖器を兼備した二根者、犯罪のために生殖器を截除せられた黃門等にも、戒を受けて大乘の學徒となることを許した。大乘戒の典據として重むじられてゐる「梵網經」下卷には、四十八輕戒の第四十として、左の揀擇受戒戒を説いてゐる。

「佛言はく、佛子人に受戒を與へむ時、一切の國王、王子、大臣、百官、比丘、比丘尼、信男、信女、姪男、姪女、十八梵天、六欲天子、無根、二根、黃門、奴婢、一切の鬼神を揀擇することを得ず、盡く戒を受くることを得せしめよ。應に教へて、身に著くるとこ

ろの袈裟は、皆壞色にして、道と相應せしむべし……」

然し、生殖器の不具な者は、一般に精神が邪狂であるから、大乘聖典に於ても、斯かる人々に接近することを警めた章句が存する。「妙法蓮華經」には、「若し他家に入らば、少女、處女、寡女等と共に語らざれ、亦復五種不男の人に近づきて、以て親厚を爲さざれ。」と説いて五種不男の人に近づかぬやう、菩薩を戒めてゐる。

次に、邪姪を最大惡と認めた點に於ては、大乘も小乗も相一致してゐる。「大智度論」には、邪姪に次の十失のあることを細説してゐる。

『邪姪に十罪あり。一には常に姪する所のものの夫主のために、之を危害せんと欲せらる。二には夫婦穆がずして、常に共に鬪諍す。三には諸の不善の法日に増長し、諸の善の法に於て日に損減す。四には身を守護せざれば、妻子孤寡なり。五には財産日に耗る。六には諸惡の事ありて、常に人のために疑はる。七には親屬、知識の愛喜せざる所となる。八には怨家の業の因縁を種ゆ。九には身壞れ命終り、死して地獄に入る。十には若

し出でて女人と爲れば、多人共に夫となり、若し男子と爲れば、婦貞潔ならず。』

邪淫は極悪罪の一であるから、「梵網經」に於ては、之を十重禁戒の第三に列し、左の如くに嚴禁してゐる。

『若佛子、自ら姪し、人を教へて姪せしめ、乃至一切の女人を故に姪することを得ざれ。

姪の因、姪の縁、姪の法、姪の業あり。乃至畜生の女、諸天、鬼神の女、及び非道に姪を行ぜむや。而も菩薩は、應に孝順心を生じて、一切の衆生を救度し、淨法を人に與ふべきに、而も反つて更に一切の人に姪を起さしめ、畜生を擇ばず、乃至母女、姉妹、六親に姪を行じて慈悲心なければ、是れ菩薩の婆羅夷罪(最重罪の義)なり。』

## 十二 在家の女菩薩に對する大乘佛教の教化

大乘佛教に於ては、在家、出家の學道者を總稱して、菩提薩埵略して菩薩と呼むのである。菩提薩埵とは、菩提(最高真理)を獲得しようとする努力する聖徒を意味する。支那の賢首

大師は、菩薩の名義を解釋して、『菩提は此に覺と謂ひ、薩埵は此に衆生と曰ふ。智を以て上は菩提を求め、悲を用て下は衆生を救ふ。』と説いてゐる。大乘佛教に於ては、家庭に在つて佛道を修行する男女の菩薩を、特に尊重する傾向がある。「維摩經」の主人公たる維摩詰は、在家の男菩薩の模範である。又大乗教に於ては、女人をも尊重してゐるから、「月上女經」「佛說玉耶女經」「勝鬘經」等の如くに、在家の女菩薩を女主人公とした經典も存する。廣大な慈悲、智慧、信念を以て、向上の一路に邁進し、一切の衆生と共に佛果に到らむがために、長劫の苦修を辭しないのが、菩薩たる者の願行である。然し、人たるの道を全うし得るものでなければ、佛果に到ることが出来ないから、菩薩行も最初は戒律の修習より始めなければならぬ。

小乗佛教に於ては、優婆塞の五戒を世間戒(俗人の戒)となし、沙彌戒及び具足戒を、出世間戒(出家の人の戒)とすること、前述の如くである。然るに、大乘の戒律は、大體世間及び出世間に共通であるから、之を在家通戒と稱する。大乘菩薩戒にも、數多の細目が分たれ

であるが、大別する時には、攝律儀戒、攝善法戒、攝衆生戒の三大戒を出でない。古來この三大戒を三聚淨戒と名けてゐる。此三大戒中、攝律儀戒は止惡門、攝善法戒は作善門であつて、共に自利の戒であるが、攝衆生戒のみは、衆生を利益する所の利他の戒である。大乘戒を説いた「本業瓔珞經」に、自性戒、受善法戒、利益衆生戒とあるのも、此三大戒である。大乘戒を説いた「善戒經」には、右の三大戒に、戒、受善法戒、爲利衆生故行戒の別名を附してゐる。或學者は、攝律儀戒を自利の戒、攝善法戒を利他の戒、攝衆生戒を自利利他圓滿の戒であると解釋してゐる。

其他、「善生經」には、大乘の五戒を説き、「優婆塞戒經」には、大乘の六重戒と二十八輕戒とを挙げ、「文殊問經」には、大乘の八戒を示し、「瑜伽論」等には、大乘の四重戒と四十八輕戒とを掲げてゐる。又「華嚴經」等には、小乘に於て世間戒となしてゐる十善戒を純化して、出家菩薩戒に轉用し、「大日經」に於ては、小乘五戒と異なる大乘五戒を在家菩薩戒となし、十善戒を出家菩薩戒となしてゐる。又「地持經」には、菩薩の八重戒が説いてある。大乘菩薩

の戒律は、右の如くに不統一であるが、一般には「梵網經」下卷に出づる十重禁戒と四十八輕戒とが依用せられてゐる。此中、十重禁戒といふのは、殺戒、盜戒、姪戒、妄語戒、酤酒戒、說四衆過戒、自讚毀他戒、慳惜加毀戒、瞋心不受悔戒、謗三寶戒から成り、貪慾、瞋恚、愚癡の三毒を對治することを目的としてゐる。支那佛教に於ては、「梵網經」に出づる輕重合して五十八の戒法を、行爲の規範と仰いでゐる。在家の女菩薩たる者は、此等の大乘戒を受持すると共に、禪定に耽り、且つ智慧を開發しなければならぬ。大乘經典中には、戒律の外に、女人の修養に關する種々なる教訓が存する。例へば、「佛說玉耶女經」には、「玉耶女よ、女人の法は、端正に倚りて嬌慢を生ずることなかれ。形貌の端正は、眞の端正に非ず唯心端正にして、人皆愛敬するは、實の端正なり。」と説いて、容貌、服飾の美よりも、精神の美を先にすべきことを説いてゐる。此教訓は、「佛說七女經」に「佛答へて曰く、世間の人は五根(眼耳鼻舌身)及び五境(色聲香味觸)を觀て好しとなすと雖、我は身に惡を行はず、口に惡を説かず、意に惡を思はざるを以て好しとなす。」とあるのと、同一の趣旨である。

又「佛說玉耶女經」には、妻たるものの缺點と美德とを指摘し、且つ七輩婦、五善、三惡等を細説してゐる。今此經典の諸譯を参照して、妻たる者の反省、修養すべき點を探らう。此經には、先づ女人に三障、十惡あることを説いて、美貌に誇る玉耶夫人の嬌慢を挫いた後、妻に母婦、妹婦、善智識婦、婦婦、婢婦、怨家婦、奪命婦の七輩あることを明にしてゐる。母婦とは、常に愛子の如くに夫婚を慈念し、晨夜侍して左右を離れず、飲食、衣服等を供養するに時宜を失はず、夫婚が他人に輕むせられぬやうにと苦心する、母の如き良妻である。妹婦とは、誠敬を捧けて夫婚に奉仕する、妹の如き良妻である。善智識婦又は師婦とは、愛念深くして夫婚の側を離れず、機密を諷諫して缺行なからしめ、善言を教授して巧業あらしめ、過を改めて善に遷らしめること、教師の如くなる良妻である。婦婦又は友婦とは、父母に誠實、恭敬を盡し、愛敬、謙讓を以て夫婚に奉仕し、貞操、威儀を修め、身口意に於て缺點のなき、良友に比すべき賢婦である。婢婦とは、謹嚴、恭順、細心、精勤、淳厚等の美德を具へ、常に忠と孝と節とを盡すことを怠らず、心口意に於て過失を犯さ

ず、夫婚に對して嬌慢の念なく、愛を失うて虐待せられても、肯て怨む所なき、良婢に似た賢婦である。怨家婦又は怨婦とは、夫婚を歡ばずして鬪諍を事とし、晝夜瞋怒を懷いて離別することを希ひ、怠惰、放逸、輕卒にして、必ず家名を汚す如き惡婦である。奪命婦又は賊婦とは、常に毒心を懷いて夫婚の慮を伺ひ、その生命、財産を奪ふことのみを念じ、終には間夫の手を假りて實夫を毒害し、己は財産を携へて他家に嫁するが如き毒婦である。以上の七輩婦中、前の五輩は良妻であり、後の二輩は惡妻である。又五輩の良妻中でも、男子の眞實の良友たる婦婦が、理想的の良妻であらう。尙此經には、妻が舅、姑、夫に事へるのに、五善、三惡の區別が存することを説いてゐる。次に列擧するのが、その五善なるものである。

- (一) 晚く臥して早く起き、頭髮を櫛り、衣服を整へ、面貌を清め、事を爲すに先つて尊長に告げ、常に恭順な心を持ち、美食があれば第一に舅姑、夫婚に進める。
- (二) 夫婚から呵嘖、罵言、鞭撻を被つても、決して恨むだり憤つたりしない。

- (三)一心に夫婚を守つて、毫も邪姪を念はない。
  - (四)常に夫婚の長壽を祈り、一身を家務に捧げる。
  - (五)常に夫婚の善を念じて、その悪を念じない。
- 次に示すのが、所謂三惡なるものである。

(一)舅姑、夫婚に奉仕せず、但美食を望むで先んじて食ひ、早く臥して遅く起き、夫婚に教誨せられる時には、目を瞋らして爭論する。

(二)夫婚に對して専心でなく、他の異性を思ふ。

(三)夫婚を死せしめて、早く再婚しようと考へてゐる。

大乘經典には、在家の女人に對する懇切な教訓が多い。又家庭生活を營みつつ大乘の妙理を現證した者の例も、諸の大乘經典に散在する。但し、大乘經典に出づる男女の多くは、架空的、神話的人物である。然し、稀には歴史的人物を借り來つて、之を理想化し神話化した例もある。「月上女經」には、維摩居士の令嬢たる月上女と呼ぶ美人が、求婚希望の貴族を多

く集めて、佛道に引き入れた物語がある。又「維摩經」の中には、其身を十方世界に現じて衆生を教化する、天女の菩薩の大説法が記してある。然し、「勝鬘經」に描かれてゐる勝鬘夫人が、恐らく在家の女菩薩の最も完全な典型であらう。左に少しく此經の内容を述べよう。波斯匿王と末利夫人との間に生れた勝鬘は、後に阿踰闍國の友稱王の妃となつた賢女である。新に佛教を信するやうになつた波斯匿王夫妻は、「勝鬘夫人は是れ我が女、聰慧・利根通敏にして悟り易し、若し佛を見奉らば、必ず速に法を解して、心疑なきことを得ん、宜しく時に信を遣はして其の道意を發すべし」と語り合つた結果、使者を派遣して勝鬘に書信を與へ、佛法を信すべきことを勧めた。勝鬘が書信を見て大に歡喜し、佛徳を讚美しつゝある時、佛陀は空中に來現した。勝鬘は佛陀の眞實の功徳を讚美し、佛陀は勝鬘が遠き將來に於て成佛することを豫言した。勝鬘は更に佛前に於て十大受と三大願とを告白した。十大受とは、左の十大誓願のことである。

(一)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、所受の戒に於て犯心を起さず。

(二)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、諸の尊長に於て慢心を起さず。

(三)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、諸の衆生に於て恚心を起さず。

(四)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、他の色身及び外の衆具に於て嫉心を起さず。

(五)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、内外の法に於て慳心を起さず。

(六)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、自ら己がために財物を受蓄せず、凡て所受あれば、貧苦の衆生を成熟せしむることをせむ。

(七)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、自ら己がために四攝法を行ぜず、一切の衆生の爲めの故に、無愛染心、無厭足心、無障礙心を以て衆生を攝受せむ。

(八)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、若し孤獨、幽繫、疾病、種々厄難、困苦の衆生を見ては、終に暫くも捨せず、必ず安穩ならしめむと欲し、義を以て饒益し衆苦を脱せしめ、然る後に捨せむ。

(九)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、若し捕と養と衆の惡律儀と及び諸の犯戒とを見ては、終に棄捨せずして、我れ力を得む時、彼々の處に於て、此の衆生を見ては應に折伏すべきものは之を折伏し、攝受すべきものは之を攝受せむ。(後略)

(十)世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、正法を攝受して終に忘失せず。(後略)

右の十大誓願中、第一より第五に至るまでは、防非、止惡を誓うた攝律儀戒であり、第六より第九に至るまでは、利他を誓うた攝衆生戒であり、第十は作善を誓うた攝善法戒である。菩薩の戒律は、この十大受に網羅せられてゐる。又勝鬘の發起した三大願は、次の如くに記せられてある。

「此實願を以て、無邊の衆生を安慰せむ。此善根を以て、一切生に於て正法智を得む。是を第一の大願と名く。我れ正法智を得已りて、無厭心を以て衆生の爲めに説かむ。是を第二の大願と名く。我れ攝受正法に於て身命財を捨し、正法を護持せむ。是を第三の大願と名く。」

後世の學者は、右の三大願に、それぞれ第一求正法智願、第二説智願、第三護法願の名を附してゐる。勝鬘は、尙進むでこの一切の諸願の歸結たる攝受正法といふ根本願を述べてゐる。攝受正法とは、大乘の妙理を信奉することである。此經典に描かれた勝鬘夫人は、大乘的精神の權化である。殊に此經典には、自性清淨心即ち眞我に關する深奥な唯心哲學と、現實と相離れざる積極的、活動的な宗教理想とが最も鮮明に説き示されてゐる。私は、世界の一切の女人が、勝鬘夫人と同じ道を歩み、人生の最高理想たる大乘涅槃を現證するやうに切望して止まない。佛教以前に於ても、印度には、マートレーキー夫人、ガールギー女史等の如く、大我の妙理を悟得した婆羅門の女哲があつた。古の女人が既に然りとすれば、今の女人は更に一層菩提の道に精進しなければならぬ。

### 十三 出家の女菩薩の願行

出家の菩薩は、在家の菩薩よりも、更に徹底的に廣大の願行を實行しなければならぬ。

願即ち誓願にも、四弘願、五大願、五誓願等がある。其中にて普く知られてゐるのは、次に擧げる四弘願である。

- (一)衆生は無邊なるも、度せんことを誓願す。
- (二)煩惱は無盡なるも、斷ぜんことを誓願す。
- (三)法門は無量なるも、學せんことを誓願す。
- (四)佛道は無上なるも、證せんことを誓願す。

行即ち修行にも、種々なる條目がある。馬鳴菩薩は、其著「大乘起信論」に於て、四種の信心と、之に伴ふべき五門の修行とを、菩薩行の根本となしてゐる。四種の信心とは、眞如、佛、法、僧に對する淨信である。五門とは、施門即ち布施行と、戒門即ち持戒行と、忍門即ち忍辱行と、進門即ち精進行と、止觀門即ち禪定、修慧の行とである。然れば、右の五門は、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六波羅蜜多即ち六度と同一のものである。六波羅蜜多是、普通に菩薩行の根本と認められてゐる。波羅蜜多是、到彼岸、畢竟又は度と譯

せられる梵語であつて、生死の此岸より涅槃の彼岸に到達するに必要な、根本の修行をいふのである。龍樹菩薩は、十波羅蜜多と四無量心とを菩薩行の根本となしてゐる。十波羅蜜多即ち十度とは、前の六度に方便、願、力、智の四度を加へたものである。四無量心とは、衆生に解脱の妙樂を與へようとする大慈心と、衆生の苦惱を除かうとする大悲心と、衆生の離苦得樂することを歡ぶ大喜心と、怨親を平等に慈愍する大捨心とである。

以上に述べた如き廣大な願行を實踐して、人類を利益するために、不斷の大活動をなすのが、大乘の菩薩行である。出家の女菩薩たる者は、必ずこの菩薩行を修習せなければならぬ。

#### 十四 大乘佛教の女人成佛論

一切の衆生には、佛性即ち佛智を開き得る靈性が存在してゐるから、菩薩行を完修した者は、皆悉く成佛し得る筈である。然るに、大乘教の中にも、『唯識論』等に據つて教義を組織し

てゐる法相宗のみは、佛性なきため永久に成佛し得ない無性有情なるものの存在することを説いてゐる。此教理と關係があるか否かは不明であるが、女人は永久に成佛することが出来ないといふ説も、種々なる大乘聖典中に記せられてある。我々は、斯かる説を女人不成佛説と名け得る。此説は、女人五障説の中にも含まれてゐる。「超日月三昧王經」には、女人五障説を出し、『五障』とは、一には六道輪廻の間、女人は大梵天王と作らず、二には帝釋と作らず、三には魔王とならず、四には轉輪聖王と作らず、五には常に六道に留りて三界を出でざれば、成佛せず。』と説いてゐる。大梵天王とは、印度神話に於ける造物神である。帝釋天とは、諸神を統御する天帝である。魔王とは、諸魔の首領である。轉輪聖王とは、四海を一統する聖帝である。「妙法蓮華經」にも、古來より女人五障説の存在してゐることを記してゐる。次に、『銀色女經』には、『三世の諸佛の眼、大地に脱落せむも、法界の諸の女人には、永に成佛の期なし。』とて、女人不成佛説を掲げてゐる。衆生は、皆先天的に佛性即ち大我を有してゐるから、衆生も本來佛であると認め得る。眞言宗に於ては、斯かる意味の



成佛を、本有若くは理具の成佛と稱し、修證によつて本有の佛性の開顯せられた状態を、修生若くは顯得の成佛と名けてゐる。女人にも理具の成佛は許し得るが、女人が佛陀に成つたといふ歴史的事實が存在しない限り、女人が顯得の成佛を實現した例は無いと言はねばならぬ。此意味からすれば、女人不成佛説も、強ち不合理ではなからう。然し、男性中に於ても、佛陀となつた歴史的人物は、釋尊一人のみである。若し釋尊以外の多くの男子に成佛の可能性を認めるならば、一切の女人にも成佛の能力ある事を許すのが至當である。是故に教理の進歩した諸大乘經に於ては、女人も成佛し得ることを力説し、その修養、奮勵を促してゐる。「佛說玉耶女經」には、玉耶婦人に對して、『汝今修行せば佛に至るを得べし。佛道學ばざるべからず、經聽かざるべからず。我れ今佛たるを得しも積善の致す所なり。大乘教には男なく女なし。法を聞かんと樂ふもの、願に隨つて得る所なり。』と説いた文がある。殊に「菩薩處胎經」には、『魔、梵、釋、女、皆身を捨てず、身を受けず、悉く現身に於て成佛することを得。』『法性は大海の如くにして、是非あるを説かず。凡夫、聖賢

の人、平等にして高下なし。唯心垢の滅するあらば、證を取ることを掌を反すが如し。』と説き、魔王たると、梵天、帝釋、女人たるとを論ぜず、煩惱の心垢を除く時には、現世に於て現身のままに成佛し得ることを斷言してゐる。「海龍王經」にも、『それ女人を以て佛道を成すべからずといはば、男子もまた得べからず。』とある。又「心地觀經」にも、『若し善男子、善女人ありて、阿耨多羅三藐三菩提心を發し、一日一夜出家修道せば、二百萬劫惡趣に墮ちず、常に善處に生れて勝妙の樂を受け、善知識に遇ひて常に退轉せず、諸佛に値ひ奉ることを得て菩提の記を受け、金剛座に坐して正覺の道を成ぜむ。』とある。「摩訶般若波羅蜜經」第十八卷には、恆伽提婆と呼ぶ一女人が、佛前に於て『世尊、我れ當に六波羅蜜を行じ、淨佛國土を取るべし。佛の般若波羅蜜中に説き給ふ所の如く、我れ盡く當に行すべし。』と誓ひ、佛陀より、『是の恆伽提婆姉は、未來世の中に當に佛と作るべし。劫を星宿と名け、佛を金華と號す。』と、成佛の豫言を授けられたことを記してゐる。

大乘佛敎中に於ても、教理の最も進むでゐる眞言、天台、淨土の諸宗は、何れも女人成

佛説を高調してゐる。眞言宗は、煩惱を淨化して靈肉調和の宗教生活を創造することを目的とし、即身成佛を實現すべきことを力説してゐる。此宗門に於て重むじられる「菩提心論」には、『若し人、佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺位を證す。』と説いて、父母の生むだ男女の穢身その儘で、佛位に上り得ることを示してゐる。又天台宗日蓮宗等は、「妙法蓮華經」に據つて一切成佛を唱へてゐる。同經の方便品には、『若し法を聞く者あらば、一として成佛せざるはなし。』とある。大乘諸經中、女人の即身成佛を、最も明快に説いてゐるのも此經である。此經の提婆達多品第十二には、娑竭羅龍王の八歳の女が、文殊菩薩の教化を受けて、大乘甚深の妙理を悟り、後に男子に變じて、南方無垢世界に往いて成佛し、諸の衆生に妙法を宣説するに至るまでの光景を、莊重な文辭を以て描いてゐる。この龍女成佛は、歴史的事實を談つたものではなく、この經典を創作した無名の佛教詩人が、その腦裡に描いてゐた理想的女人の性格を、「妙法蓮華經」と題する宗教小説に於て發表したものである。又この經の勸持品では、生主、耶輸陀羅等の諸比丘尼が、將

來成佛することを豫言してゐる。右の龍女成佛の眞義に關しては、古來紛々たる異説が存する。龍女の轉女成男といふのは、單に生殖器の轉改を意味するのや、或は内心の進化を暗示したのが、古來よりの一大疑點である。思ふに、短身、軟肉の女形のまゝに佛智を開いたことをば、變成男子といふ語で表したものであらう。「大般涅槃經」にも、『若し能く自ら佛性ありと知る者を、我は是人丈夫の相たりと説く。若し女人有りて、能く自身に定めて佛性あるを知らば、當に知るべし、是等を即ち男子と爲す。』と説き、佛性を開顯した女人を男子と認めてゐる。龍女が變じて男子に成つたといふのも、斯かる意味を寓したものであらう。然し、龍女成佛を以て過去に起つた事件とせず、將來この龍女の如き理想的女人の出現することを期待したものと見る時には、二千年前の古經も、新しい意義を齎して來るのである。過去に於ける東西の女性は、男性の不正なる壓迫を受けて、畜生の如き悲境に沈淪してゐた一種の龍女である。今や、若い龍女たちが、文殊菩薩の如き聰明な哲人の指導により、多年の拘禁から放たれて、男子に劣らざる新文化を創造すべき機運に際會してゐる。

るのである。日蓮聖人も、『開目鈔』の中に、『龍女が成佛これ一人に非ず、一切の女人の成佛を表はす。法華已前の諸大乘經には、成佛の往生を許すやうなれども、或は改轉の成佛にして、一念三千の成佛に非ざれば、有名無實の成佛往生也。舉一例諸と申て、龍女が成佛は、末代女人の成佛往生の道をふみあけたるなるべし。』と説いてゐる。今日が、正しく龍女成佛を實現すべき時代である。現代の女人は、古經に描かれてゐる勝鬘夫人、龍女等の如く、眞理と信仰と慈悲とに目覺めた女菩薩として、家族、國家、社會の進化に努力し、地上に淨土を建設することを目的としなければならぬ。

阿彌陀佛の救濟を仰いで、淨土に往生することを希ふ、眞宗、淨土宗等の他力佛教に於ても、女人の成佛を承認してゐる。永劫の昔、阿彌陀如來が、法藏菩薩として佛道を修行してゐた際に立てたといふ、四十八條の誓願の中にも、第三十五に女人往生の願が存する。『佛說無量壽經一卷上に出づる第三十五願の文には、『設ひ我れ佛を得たらむに、十方の無量の不可思議の諸佛世界に、其れ女人有りて我が名字を聞き、歡喜、信樂して菩提心を發し、

女身を厭惡せむ。壽終の後、復女像と爲らば、正覺を取らじ。』とある。親鸞聖人は、『帖外九種和讃』の中に於て、右の願文の大意を左の如くに歌つてゐる。

『六八の弘誓のそのなかに

第三十五の願に

彌陀はことに女人を

引接せんとちかひしか』

同聖人は、更に『淨土和讃』の中に於ても、阿彌陀佛の女人成佛願を左の如くに讚美してゐる。

『彌陀の大悲ふかければ

佛智の不思議をあらはして

變成男子の願を立て

女人成佛ちかひたり』

自力佛教たると他力佛教たるとを問はず、佛智を開いて眞我を捉むことが究竟目的である。私は佛教の女性観を考察し來つて、女性も男性の同行として、共に眞理の嶺に上り得るといふ斷案を得たのを歡むで止まない。如何なる人の心にも、佛性の靈寶が秘藏せられてあるから、これを獲得しようと思ふなければならぬ。今筆を擱くに先ち、日本古代の今様歌と印度現時の民謡とを記して、大聖釋尊の崇高な心にも、我々の醜惡な身にも、隔てなく妙光を分つ所の、一如の大靈を禮讚しよう。

『佛も昔は凡夫なり』

われ等も終には佛なり

三因(一書に同じく)と記す)佛性具せる身を

隔つるのみぞ悲しけれ』……(日本今様)

『主よ、わが罪垢を賤むなかれ』

大慈悲者と稱へらるる主よ

我等を共に梵(大我)たらしめよ

神堂の聖像となれる鐵も

屠者の利刃となれる鐵も

靈石に觸れなば皆黄金に變ず

閻牟那河の淨水も

路邊の溝なる穢水も

恒河に落ちなば皆靈水に變ず

さればわが罪垢を賤むなかれ

大慈悲者と稱へらるる主よ

我等を共に梵たらしめよ』……(印度民謡)

### 一如洞聖綱

一如洞は、印度梵教の宣布、印度文化の考究、印度美風の移植、東洋文化の獨立、世界諸教の協和の諸事を遂ぐるため、講傳、禮讚、調査、展覽、刊行の諸業に努むる根本道場にして、阿闍梨之を統理す。

### 佛教女性觀(終)

昭和四年十二月九日 印刷納本  
昭和四年十二月十三日 發行



發  
兌

佛教女性觀

定價 金五拾錢

著者 東京市小石川區雜司ヶ谷町九十八  
武田 豊四郎

電話牛込四〇六〇番

發行兼印刷者 東京西巢鴨町巢鴨二〇〇七番地  
檜 桓 匡

印刷所 東京西巢鴨町巢鴨二〇〇七番地  
ヒガキ印刷所  
電話大塚二三一五番

東京西巢鴨町巢鴨二〇〇七番地

三 申 社

電話大塚二三一五番  
振替口座東京二三二五番

終

